

# 乙卯研究所小史

特にシオノギとの関連において

発行・発刊：塩野義製薬株式会社 資料室

昭和 42 年 1 月 30 日

企画・編集：財団法人 乙卯研究所

平成 17 年 4 月 21 日

## 目 次

近藤平三郎博士との結び付き .....	3
芝区葦手町の乙卯研究所 .....	5
青山南町の研究所 .....	7
不燃性乙卯研究所（渋谷区金王町） .....	16
近藤博士のおしえを受けた人々 .....	20
永遠に生きるもの .....	25
一つのすぐれた頭脳 .....	26
新乙卯研究所（世田谷玉川町） .....	28
参 考 資 料 .....	31
乙卯研究所・シオノギ年表 .....	32

## 乙 卯 研 究 所 小 史

### 特 に シ オ ノ ギ と の 関 連 に お い て

#### 近 藤 平 三 郎 博 士 と の 結 び 付 き

近藤博士は明治十年、静岡県加茂郡松崎港（いまの松崎町）に生まれた。本郷のドイツ語学校を経て一高に学び、明治三十年九月中旬、東京帝国大学薬学科に入学した。博士が入学した当時の講義陣には下山順一郎、長井長義、丹波敬三、丹波藤吉郎氏ら草創期の薬学界を背負う巨星が並んでいたが、博士は「エフェドリン・ナガキ」で知られる長井博士にとくに私淑した。

明治三十三年七月、卒業と同時に陸軍薬剤官として陸軍衛生材料廠に勤務し、人生の第一歩を軍人として踏み出したが、博士の才能を惜しむ大学側では軍在籍のまま大学勤務という前例のない措置をとり、軍服姿の研究生活が開始された。

その後、日露戦争に出征して活躍したが、戦後約四年間、ドイツへ留学して有機化学、放射能の研究を積み、同四十四年三月帰国した。

その年の初夏も近いある日、ドイツ留学を終えて帰国した近藤平三郎博士は岐阜市花屋旅館の一室で、二人の客と会った。風は暖かく、戸外には木々の新緑が燃えるようであった。

二人の客は塩野正太郎と弟の長次郎である。紹介の労を取ったのは北畠安五郎氏。北畠氏はこの年、日本エナメル株式会社を創立したばかりで、知り合いの長次郎に何かと相談を持ちかけていたし、長次郎の方も塩野製薬所の設備や技術改善について同氏の意見を聞くことが多かったが「技術指導には近藤博士が最適任者だ」という氏の勧めによって、両者の初顔合せとなった。博士はこのとき陸軍省の療養所建設用地を選定するために東北地方の視察を終えて岐阜に入ったときである。（二代塩野義三郎伝から）

「……長井先生は大日本製薬、下山先生は三共、丹波先生はバラ歯磨本舗などと技術顧問を引き受けておられたが、何れもその製品はほとんど外国処方域を出てはおらなかった。

治療界もまた洋薬依存のため、薬業界も自づと輸入医薬品に主力を注いで国内生産が振わないという因果関係を塩野長次郎は突き破ろうと近藤博士の助勢を求めたのであった。……」これは近藤博士が「藤園回想」で語った言葉であるが、塩野長次郎の熱意がうかがわれる。

花屋旅館で東西に別れてから間もなく塩野義三郎、正太郎、長次郎三人連れで近藤博士宅を訪ねて正式に塩野製薬所の顧問になることを依頼され、ここにはじめて快諾を得て、シオノギと近藤博士との結び付きが出来たのである。

当時、塩野長次郎は淀川河畔に塩野製薬所を建設（明治四十三年）、五千元、一万元と二年間赤字が続いていたときであった。

開所当時の製品は塩酸キニーネおよび相生町から引き継いだサリチル酸ソーダやアントチゲンであったが、近藤博士にはコカインの精製法とエチル炭酸キニーネの製造を依頼した。

博士は公務の余暇にこれらの実験をこころみ、期待に応じることが出来た。技術上の参考意見は主に長次郎あてに書面の往復で提供していたが、塩野製薬所の実地指導は博士が休暇

を利用して西下し、往復夜行の強行にも疲れを知らなかったといわれる。

当時の製品に近藤博士が、犬馬の労をとったというヂギタミンがある。

このことについて近藤博士は「藤園回想」で「ある日偶然乗合せた電車の立話で、渡辺から研究の製品化の相談を持ちかけられた。ちょうど塩野義と関係を結んだ直後なので、早速塩野長次郎に橋渡しをすると否やはなく（原文のまま）、円満に交渉が成立した。私がヂギタミンと命名して具体化の運びになり、多年の渡辺の友情にむくいることが出来て愉快であった。」と語っている。

当初の新薬界は輸入品偏重のときであり、強心剤としてはロシュのヂガーレンが圧倒的な地盤を保持しており、売込みには大変な苦勞が伴った。

明治四十五年七月二十五日の薬業時論は「心臓新薬ヂギタミン」と題して紹介記事を掲げた。

ヂギタミンは渡辺薬学士が数年に亘り研究せられたるヂギタリス製剤にして、氏は化学的及動物試験に於て其効価を確定し、次いで木下医学士監督指導により、最も精密なる動物試験を経、塩野薬学士により製造せられ而して武井高医学士に依て、毎次有効成分の含量を一定したる理想の新薬にして、既に最高学識ある多数医家の臨床的実験を経、無害にして実効認められたる例証数百に達し其価値愈々確定し、茲に発売せらるるに至る。

発売元 大阪道修町 塩野商店

#### 〔容器と消毒〕

(1) 壺 15 cc 入（内服及注射用）にして五瓶を以て壺箱とし每瓶ゴム質を以て密栓す。  
(2) 外に壺、壺 cc を注射専用品として小瓶（アンピューレ）に収め五本を以て壺箱とす。每品完全なる設備のもとに薬剤師によって取扱われ充分なる滅菌を施せるを以て内服、注射、洗腸等又何等の差支えなし。

#### 〔本品とヂギトキシン溶液の比較〕

近來各地に於て粗製ヂギトキシン溶液に対し種々の名称を附し販売せる向、少なからず。之れらは種々の原因により時に何等の効を奏せず、為めに瀕死の重患に対し恐る可き結果を呈するは往々目撃する所にして、本品の如く、完全ヂギタリスプレパレートは同一の論に非ざるは臨床医家の大いに注意を要する所なり。

児玉秀衛の回顧談によると「ヂギタミンに対するロシュ社ヂガーレンとの競争も又一段と激化する様になり、角帯、前垂姿で医者に売込みやら宣伝に参るのはどうも具合が悪いので初めて三十円也を出し洋服を一着新調して道修町で異彩を放ちました。地方廻りをするのにフロックコートに山高帽子という堂々たる風采で汽車に乗り込み来客の目を瞠らしたものでした」と新奇をこらした宣伝に努めたようである。

大正三年の第一次世界大戦によってこの頃まで尠からず輸入品の圧迫を受けて思うように売行が進展しなかったヂギタミンも、ヂガーレンの輸入杜絶によって半独占的強味を發揮、注文殺到へと好転した。

## 芝区葦手町の乙卯研究所

塩野製薬所からの研究依頼が来ても公務の余暇では十分な研究が出来ぬ。

公然と実験の出来る研究所(決して他人が見てこれは立派な研究所であるというような必要もないが)を東京に設置しなければ駄目だと塩野長次郎に提案した。この案は直ちに受入れられて実現の運びとなった。

それは丁度大正三年頃であった。

博士が盲腸で寝ているとき見舞に来た岡田十一郎(得業士)にこの計画を伝え、土地の物色を依頼した。たまたま全氏の住んでいる近くに青木周蔵子爵の屋敷があり、その山裾は実験の臭いガスが発生しても附近には迷惑にならぬということで芝区葦手町十六番地が候補地に上がった。場所は愛宕山の裏に出るトンネルの筋向を横に入ったところであった。

この研究室は三十平方メートル(十坪)程のもので板張りの実験室である。大きな実験台を一つ置き、隣に洗瓶室も設け大正四年六月十日開所式を行なった。

この研究所を命名するに最初塩野正太郎は近藤研究所はどうかと提案した。博士は近藤研究所では何んとなく目立って具合が悪いと賛意を示さず、“塩野研究所”も案には出たが結局この年に因んで“乙卯研究所”がよいだろうということになり、正太郎も博士もオツウと呼んだ。



葦手町時代の乙卯研究所  
(大正4年11月8日)

英文では Research Foundation Ituu Laboratory である。

(近藤平三郎博士談)

あっちこっちから何と読むんだ、読めないじゃないかと云って来る。おれはオツウと読むというと、真島君はそれはだめだ重箱読みだ、オツボウと読むのだ。しかし仮名をつけていないから大丈夫だ、お前達の読みたいように読んでおればいいんだと云ったがね。

(昭和34年8月 帝国ホテル座談会で)

ここでの仕事はプロタルゴールの研究が真先にとり上げられてプロテイン銀が生れた。助手は成田象一、岡田十一郎(衛

生材料廠助手)で他に器具洗滌の女子を加えて三名であった。博士は研究所の出勤日を原則的に、公職に障らない週末の土、日曜日に当て、特に木曜日には都合をつけて見えることもあった。所員の休日は、月二回(一日、十五日)とし、月曜日を休日とすることになったのは青山南町に移転後で、富田真雄、矢野潔入所後のことであった。木曜日に博士の来研ないときは



葦手町時代の研究所員

(左から 近藤博士・岡田十一郎・成田象一氏)

(大正4年11月8日)

助手二人で報告や打合せに本郷の博士宅を訪問し、話に興がのって終電の間に合わず、芝の研究所宿舎まで十キロ余の夜道を歩いて帰ったこともあったという。また、午後から来研されて研究指導をされる場合は、熱心のあまり、しばしば時間の過ぎるのも忘れ、夜八時一九時までも続けられるので若い成田所員などは空腹に閉口したと当時を回想して語っているが、温厚で敬慕せる博士の指導のもと、所員一同和気藹々の研究生活であったことが伺われる。

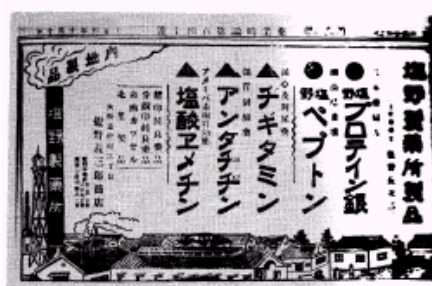
博士は同年秋、青山渋谷の長井邸敷地内に和風の住居を新築移転した。

塩野正太郎は、この研究所育成のため人件費、維持費として半期三百円と別に三百円を博士に送っていた（大正五年十二月十一日書翰）が一名近藤（宗）の増員もあり、博士からの要望で千二百円を来年五月末までの分として送金することとなった。

この頃、時局に先手を打って塩酸プロカイン（ネオカイン）やフェノバリン（ラキサトル）の研究もすすめ、事業は順調に伸びて一年後には拡張の必要に迫られた。

乙卯研究所とは別個に博士は水金製造の研究をこの頃すでに開始していた。若しここで成功すれば具体的に大阪に水金製造工場建設という計画もあり、そのときは成田を指導者として派遣する手筈になっていた。

一方当時、塩野製作所が製造していた品目の主なものは次の通りである。



薬業時論掲載広告（大正4年10月10日）

チギタミン	グアヤコールスルフォン酸カリ	アスピリン
アンタチヂン	塩酸コカイン	デルマトール
プロテイン銀	乾燥ペプトン	エチル炭酸キニーネ
塩酸エメチン	吐酒石	サッカリン
ゲブルチン	塩酸阿片アルカロイド	
ミオトニン	ビスミット	

（口羽氏ノート・薬業時論広告抜萃による）

## 青山南町の研究所

五年の十二月には青山南町の土地の交渉も終り、新しい研究所を建設する手筈をととのえ、その電気機械一式も発注した。

新研究所は赤坂区青山南町五丁目で青山墓地脇の約八〇〇平方メートル（約二百五十坪）に四十四坪の木造建物を建てた。葺手町の研究所からすれば約四倍に近いものであった。

六年の二月頃から工事にかかり六月十日に落成式をあげた。

土地入手のことについて次のようなエピソードがある。

「乙卯研究所の第二期拡張を考えて新築のため土地を探がしたことがあった。成るべく私の家に近く、近所から臭気などの苦情の持ち込まれないような所というので青山の墓地脇の一角に三百坪程の新地を発見した。新地とはいえ、湿地を埋めるために土地や瓦礫を棄てて地面をならした場所だから借地に面倒はあるまいと地主を捜し当てると五丁目の本尾敬三郎という大地主と判ったが研究所の仕事には貸せないという。そこで困った揚句ふと長井先生と親しい関係にある本尾氏かと思ひ長井先生と私の関係を説明すると漸く貸してくれたが、理財に長じた人だと云う程あつて本尾老は、念のため先生を訪ねて私との関係を確めたと後日先生から聞いたことがある。」（薬学第二巻）

塩野製薬所では、ヂギタミンに続いて塩酸エメチン（末、注射）、ミオトニン、ペルボラックス（過酸化硼砂）など他社にさきがけて製造を開始し、新薬メーカーとしての基盤を確立していった。塩野義三郎商店から「日新治療」が創刊されて医薬学界の話題になったのもこの頃である。

（大正六年五月）

衛生材料廠の中島知一は近藤博士の指導のもとで、塩酸プロカインの製造に成功した。

（大正六年）

局所麻酔薬が払底していた時代であつたので、この年の三月、塩野製薬所はその製造指導を受けるため、

口羽与三郎（入社 大正五年三月 退社 昭和二十三年十二月）、

三戸晴寿（入社 大正五年八月 退社 昭和二十年十二月）の二人を乙卯研究所へ派遣した。これが、乙研留学といわれる最初である。二人は塩酸プロカインの長い行程を二つに分けて研究し、六月工場へ戻った。直ちに生産を開始、ネオカインとして発売した。

新薬の開発は次々とスピーデーに進められた。欧州大戦の結果、海外からの新薬は杜絶状態にあり、この時代の新発売広告を見るに

「輸入品欠乏に対する塩野製品ヘルミトール（新ウロトピン）」

「 〃 〃 タンニーゲン（アセチールタンニン）」

「輸入品杜絶の結果、全く欠乏を来し、学界に不便を与ふるは遺憾なりとし、邦製ゲームザ氏液云々」

「独乙品輸入杜絶以来殆んど求むるに困難…塩野製薬所製造 ドルミン」

など、外国品崇拜の気風を一気にくつがえさんばかりの意気込みであった。

ドルミンの製造は、東京衛生試験所がアダリン並びにブロムラールの合成を試験所彙報第

邦製アダリン発売	
塩野製薬所製造	
催眠鎮静剤	
(化学名)	
プロムヂエチルアセチル尿素	ドルミン

十六号（大正五年）に発表したのがきっかけで、乙研留学を終えた三戸が、これを指針として研究に入った。

欧州大戦の結果、輸入杜絶でアダリンの入手が困難なときであった。当時、尿素をとるのに空中窒素による固定法もなく、クロードカザリー法による硝酸尿素としてとるか黄血塩から造るか、全くこの合成には苦勞したが乙研の指導も受けて、初めてプロムヂエチルアセチル尿素の合成に成功したときは、飛びあがる喜びを感じたという。

この頃の広告にはとバイエルの商品名アダリンを前に打ち出して時代を反映しているのがやはり目立つ。

大正七年乙研では近藤博士指導のもとで中島知一がフェノバリンの合成を完成した。早速指導を受けて塩野製薬所では乙研に留学した口羽にこれを担当せしめ、ラキサトールとして発売した。

上げ潮に乗った塩野義三郎商店は翌年の大正八年六月五日塩野製薬所を合併して「株式会社塩野義商店」となり、塩野製薬所を製薬部淀川工場とした。社長に初代塩野義三郎、取締役塩野正太郎、塩野長次郎、沢田久吉、津久井長甫、監査役に堀内善五郎、塩野重三郎がそれぞれ就任した。

重三郎は塩野長次郎の末弟である。浦江でウルトラマリンとゼラチンの製造を経営していたが、大成を見ずしてこの年十二月流行性感冒で不幸世を去った。この工場は群青工場と呼ばれていたが、彼の逝去によって顔料、塗料の事業もともに中絶されたのは遺憾である。

大正九年二月二日初代義三郎は会社の経営を長男正太郎に譲り、第一線から引退して取締役となり、名前を義一と改めた。このときから正太郎は二代義三郎を襲名した。

淀川工場からはヒポホルム、沃度蒼鉛エメチン、塩酸シノメニン、パラヌトリン、ソムナールなども相前後して生産せられる一方、医薬品に対する国内需要が急ピッチで上昇してきた。塩野義の業績も飛躍的に上がっていき、これに応じて薬品の品質を統一するため薬品試験のほか小分、包装などの能率化、組織化がはかられ、大正十年三月大阪市西淀川区浦江上二丁目に試験部が新設された。これが浦江工場のはじまりである。

相つぐ製品の大量生産は淀川工場だけではさばききれなくなり、試験部ができた翌年の大正十一年五月兵庫県川辺郡小田村今福の神戸醋酸工業の土地建物を買収し、杭瀬工場の看板を掲げて塩酸シノメニンとヂギタミンの増産にはげんだ。

大正七年京都帝大を卒業した高折茂は囑託として十二月入社した。それは長次郎と三高時代同期の岡林教授の推薦によるものであり、京大の研究室に通いつつオホツヅラフジのアルカロイド研究の傍ら将来のため研究室に必要な文献を買い集めていた。

ヂギタミンの効力検定法の確立を急ぐ長次郎は、薬理研究室（医薬品メーカーの中で三共だけが持っていた）創設のため、高折をして人材を探させることとなった。高折はオホツヅ



ラフジの研究者彦根病院長石割仁三郎を訪ね、この話をつたえたところ、同病院の鶴田静磨医員を推薦し、長次郎がすぐ面接してきまり、神戸醋酸工場買収間もない杭瀬工場へ赴任した。大正十一年七月二十五日である。

それから一ヶ月後、乙卯研究所で博士の指導のもとエメチンの製造研究をしていた福田鉄雄が長次郎に推薦をうけて、杭瀬工場勤務となった。

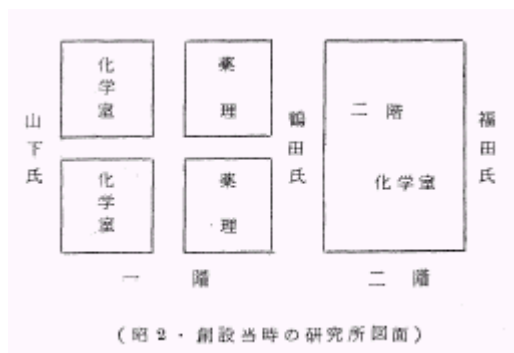
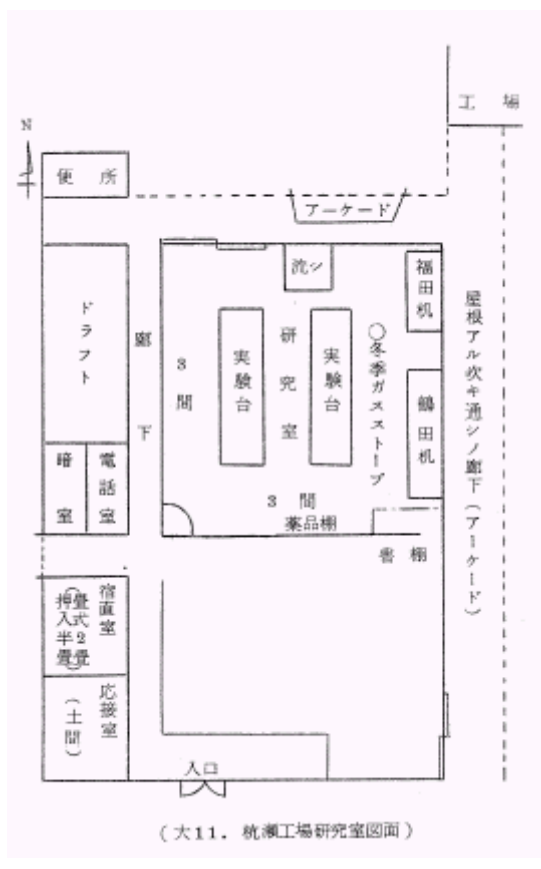
福田鉄雄は古いノートを繰りながら当時の模様を次のように回想した。

「東京を発って二十九日朝、梅田駅に着きました。駅には三戸晴寿さんが迎えに来て下さって一緒に淀川工場へ案内されて、塩野長次郎さんにお会いしました。その堂々たる風采はたのもしく悠揚せまらぬ応待振りには魅力があふれておりました。これが塩野所長さんの第一印象です。

私の職場は杭瀬の研究室でしたが勤務時間は朝七時から夕方五時まででした。とりあえずデギタリスの文献を勉強せねばならず、淀川工場の二階で約一ヶ月ばかり文献読みをやり、翌年の三月頃から杭瀬工場の寄宿舎に移りました。神戸醋酸工業の赤煉瓦建工場の他に、その社宅が平屋で五、六戸約五間間隔で南北に平行して二棟建っていて、私は工場寄りの棟に住んでいました。勤務終了後は林、太田、諫川、村田の諸君とテニスをやり、夕食雑談の後、八時頃から研究室に戻って大抵十二時～一時頃まで文献読みを続け、工場回りしてから寄宿に帰って就寝という毎日でした。……」

第一工場といわれる赤煉瓦建の西南にバラック建を一戸設置して鶴田は薬理、福田は化学という二つの部門に分けて担当した。当時の図面を参考までに掲げる。(福田、諫川記憶図)

その頃、彼の研究はデギタリス水溶性配糖体、デギタリス有効成分のピクリン酸呈色反応による効力検定と福寿草、夾竹桃などの強心剤の研究、十二年に入って「ヤツデ」の研究から六月フアトシンの試製品を出すまでの機械の設計までやり、ほかにデギカルフェン、スペチヨード、アドゾルビンS、硝酸銀溶液点眼剤、スルフオサリチル酸などの製造研究や





青山南町の乙卯研究所図書館  
(2階建、地下1階)



青山南町時代の乙卯研究所員  
(中央) 近藤博士  
(昭和8年4月)

セカルチンの改良研究、十四年コカイン、アンヂスメンなどの製造研究をすすめている。

杭瀬工場内に研究所が建設されたのは昭和二年であるが、この研究所設立について高折博士は「塩野義研究所の前身である研究室をつくった功労者は、福田鉄雄氏です。設計、設備、図書その他について大変苦勞されました。」と言葉少な

に語った。福田の記録によると、大正十四年の末に、所長から研究所建設計画大要を知らされ、鶴田、山下卯三郎らと協議して設計図面をひき、それを横河工務所の松井工業士にトレースさせた。設計完了は翌年の四月頃で、着工は五月上旬、調査課業務の傍ら研究所工事の推渉状況の監督をまかされ、昭和二年三月、鉄筋建築の研究所が竣工した。

福田鉄雄は三月二十二日、数日に迫った竣工式の喜びを胸に秘めて二階の化学室に上がり、机を前にして将来の構想を練った。しかし、すでに胸部をおかされていた彼は悪寒を覚えて自宅へ急いだが、この輝かしい竣工式を前にして喀血のためついに病床に臥せった。(その後、昭和四年八月まで在籍、以後退職して郷里に帰り、岩手医専薬局長となる。昭和四十年九月二十一日逝去) ※スペチヨードは高折博士の奨めにより乙研で成田所員が試製完了したものである。

大正十二年九月一日、近藤博士はちょうど暑中休暇中であ

ったが大学に出て実験をしているときであった。

十一時五十八分、突如異様な地鳴りとともにあの歴史的な関東大地震が襲来した。校門を出た博士は、下町に火の手が上がり血相を変えた避難者の群が通路を埋めているのを見た。その瞬間、乙卯研究所が火災を起しておらぬかとの不安がつり、本郷から水道橋を通り青山へたどりついたのは夕暮近い頃であったが、全く奇蹟にも乙卯研究所が薄暮の中に原形をとどめていた。

青山墓地周辺の土地は埋立地であり、その上に建てた木造建築では倒壊、炎上もやむを得ないと覚悟をきめていたが、幸い所員成田象一の機転によって、ガスの元栓が締められて火災をまぬがれたということである。

数日後、渡辺又治郎が研究所の見舞に来て銀行通帳を何かに役立ててくれと云って無造作に差出した。その預金はヂギタミンの利益の分配金を一部博士のために積立てたものであった。博士はその金の使途につき蔵書の保管場所がないため図書館を建てたいと渡辺や長次郎に申し出て、震災を蒙った青山の研究所の玄関口に地階一階、地上二階のコンクリート建の図書館を建築することが出来た。

大正十四年、乙卯研究所は十周年を迎え、四月十一日午後一時から義三郎、長次郎、渡辺又治郎、落合英二、中里辰雄、西池正顕（東京出張所長）や乙研建設技師などが集まり、座談会のあと帝国ホテルで記念パーティを開いた。義三郎に宛てた手紙には「お蔭を以て研究所十周年も理想的に祝宴滞りなく相済み候、本懐之れに過ぎず、（中略）益々馬力を掛け貴方の期待に違わざる様心掛け可申候」と、喜びの一端をのべている。

関東大震災があつて三年目、震災手形の後始末から昭和二年はからずも我が国経済史上最大の金融恐慌が起きた。そして東京渡辺銀行の取付け騒ぎから第二流銀行村井銀行ほか三行にまで及んだ。

義三郎から乙卯研究所へ送られた運営資金は全部この村井銀行に預金されていたが、この銀行休業が遂いには破算にまで至らぬかという不安がつのつた。しかし、預金の四割一分五厘切捨の整理案が出て先ずはほっとした一幕もあった。

「……兼ねて御心配相かけ申居候村井銀行当座の件、漸く五割八分五厘回収予想条件にて正式に調印を求め来候（不承知の場合は満十年据置き無利子一時払。或は無利子にて満二十一ヶ年割償還）まま、四割一分五厘の切捨にても即金回収に調印を与え申候。

目下、預金者の四割の承諾を得たる由にて何時到着するやまだ猫の目の如く、推考測り難き財界の天候心細く御座候も右お含み置き御承認願上候（金二、七三二円三八銭、現在にてその五割八分五厘、金一、五九八円四四銭、外に〔自〕大正十五年十二月十三日〔至〕昭和二年三月十九日]

利子の五割八分五厘、金一六円五八銭を合計し金一、六一五円〇二銭回収予想額と相成候）……」と義三郎に報告があつた。



有馬殿ヶ滝にて  
（左から）近藤博士・塩野義三郎・渡辺又治郎氏 北島安五郎氏・塩野長次郎 （大正15年8月5日）

義三郎、長次郎は博士をはじめ、博士のクラスメート渡辺又治郎博士らと打連れて、一年に一回国内旅行をしたものだが、こういうくつろいだ時間を通じて互の人的な交わりが深まっていた。

この昭和二年は消炎、鎮痛の巴布剤エキシカを発売した年である。新しい巴布剤としてアンチフロジスチン（パークデビス）をはるかに凌駕し、疾風のように売行きが伸びた。その翌年、武田長兵衛商店がホスピンを発売してシオノギ

を追い、金に糸目をつけぬ宣伝戦のかたわら、販売は販売でシノギをけづり、同業者間の話題をさらった。

道修町の長老、伊藤千太郎翁が両者の斡旋を買って出た結果、シオノギとタケダとの間に協定が成立、昭和四年、製造販売の統制機関として二巴合名会社が生まれ、両製品ともエキホスと名付けられて買上げ販売されるという大メーカーの間で協定が円滑に行なわれた珍しいケースがあつたが、このときのシオノギの代表者として調停の責任者は塩野長次郎があつた。

このほか、乙研で成田所員が試製したポアールをはじめオイロ、ジンゼニン、スペチヨード、ガロステリン、ダゾール、ゲネゾール、ビオゼニン、パンセプチンなどシオノギの生涯品目が増し、併せて取次販売品の数もまた増加の一途をたどった。

近藤博士は毎年、夏期休暇に来阪して、塩野義の工場を回り、問題があれば「乙研」に持ち帰って所員とともに研究していた。

昭和四年九月十三日、長次郎（四十七才）は博士（五十三才）とともに、コレア丸で横浜から欧米の旅に出た。アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、スイスなど製薬事情視察を終って、翌年五月春シベリア回りで帰国した。

アメリカの工場視察はセントルイスのモンサント化学工場からはじまった。インディアナポリスではカプセル、インズリンなどシオノギと古くから取引関係にあるリリー社で歓迎を受けたのち、デトロイトに向い、パークデビス工場、アーサーコルトン製錠機械工場、フォード工場も忙しく見学して廻った。ニューヨークでは、近藤博士が骨身を削って研究した水金の思い出にハノビア工場見学の念願も果たし、続いてセントラル・ケミカル・カンパニーのラジウムエマナチオン工場、ピッツバーグのスタンダード・ケミカル・カンパニーなどの視察もラジウム研究の博士には見落してはならないものであった。ピッツバーグを終えてその日の夜にワシントンに入った。ロックフェラー研究所をはじめ、全米の kongress・ライブラリーのほか各種工場やマルホード薬品会社も見学したが、特に同社のデジタリス栽培園の壮観は、長次郎の興味をひいた。

一ヶ月余りの間に全米の視察を終えた二人は、ヨーロッパに渡り、英国、オランダを経てドイツに入り、メルクをはじめ、イーゲーのヘキスト染料工場や同オッパウの空中窒素固定工場※を参観。クノル会社では社長以下総出で歓迎を受けたという。その翌日はスイスに入り、ホフマン・ラ・ロシュ社のアルカロイド浸出部門に重点をおいて見学した。※オッパウの空中窒素固定工場はイーゲーのバーチッシュ・アニリンソーダ会社のオッパウ工場である。

昭和六年四月、近藤博士は上海民国医薬学会の招きを受けたとき義三郎をさそい、上海の旅に出た。一行には医学代表の三宅鉦一教授、成田象一乙卯研究所員も加わり、四月二日神戸から出航した。

上海には駐在所もあり、現地で特約店主や小売店主、医師などの生みの声を聞き、シオノギの中国進出に新しい道を開きたいと思ったからでもあった。彼にとっては、初めての国外旅行で、わずか十二日間の忙しい旅行であった。このことについては「二代塩野義三郎伝」に詳しく掲載されているので省略する。

長次郎帰国後の活躍は、兄義三郎、父義一翁のひとしく期待していたところであったが、昭和六年五月十日早朝卒然としてこの世を去った。没年四十八才。

製薬部門の運営を彼に任せきりだった義三郎には会社の全責任が双肩にかかってくることとなった。豪放な反面、都会人の繊細な神経の持主だった義三郎は近藤博士の友情と激励がただ一つの支えだった。

近藤博士はその胸中を察して早速激励と運営の助言について手紙を送った。

「…………製薬部門の組織をすべて系統的に律して各責任の所在を明かにし、製薬部対本店の交渉を円滑かつ有効ならしむること、長次郎君を失える会社の緊急時と確認いたし候、杭瀬の研究部についてもせつかくの設備を有することゆえ、一その活用をいたしたく、私も将来年三、四回は参りたく考えおり候次第に候。従来、乙卯研究所からの報告は全部長次郎君あて私より差出しおり候えども今後は貴兄あて差出すべく考えおり候」

(六年五月十九日)

その年の暮、道修町に生を享けシオノギの基礎を築いた義一翁は池田で七十七才の生涯を閉じた。

塩野家は重なる深い喪にとざされたまま昭和七年を迎えた。その翌年五月十日、塩野長次郎の追福供養のために“四十九年※”を出版して関係者に贈った。※(この“四十九年”は塩野長次郎一個人の追憶に止まらず乙卯研究所の歴史にもふれている貴重な資料である。)

義三郎にとって長次郎といい、義一翁といい、彼の事業を援ける支柱ただだけに、受けた打撃もまた大きかったが、このとき、近藤博士の存在はまさしく太陽にひとしかった。

製薬に関する博士の研究、意見は義三郎を通じて部長に回覧された。営業に対する博士の意見は惰性的なものを一新すべしとする科学者らしいものであったが、これは義三郎の考え方と全く合致し、つぎつぎと新しい努力が積み重ねられた。



七月には乙卯研究所の連絡係として窪美温と山下卯三郎が当り、近藤博士に研究の進行状況を報告することとなった。

この頃のシオノギ製薬部研究所は、次のような配置になっていた。

昭和六年七月からは新しく規程を定め、(三年には「営業品製造販売調査会」とした)大正十五年からあった調査会が新発足した。新規発売品について臨床実験、文献報告、形状、耐久性、原料製造法、小分法、価格を含めての市場調査などが審議され、既製品の改良や新しい取次品の選択などについても協議決定されていった。この討論を通じて、工場の進行状況もわかり、また隘路もその都度発表されて、義三郎は工場の技術問題にくわしくなった。

「工場中堅諸君の緊張努力の業績は今回特に顕著に見受けられ、未曾有のことと心ひそかに欣喜に不堪候。この軌道を脱線せず進展すれば実に万才に候」とは博士のいつわらざる感想であった。

昭和八年博士から将来を嘱望されてシオノギに入社した矢野潔は、着任早々現在の製造部内の空気を見て矢野は改善提案を卒直に伝えたが、博士は、それは百年の策でないとしたしなめ、調査会の重大なる役割が充分果せるように部内で協議することを指示した旨を義三郎に報告した。

昭和八年五月二十六日、シオノギでは業務規程の改正があり、製薬部、研究所等につき事務分掌を明らかにした。

- (1)部、課、工場、試験所ニ各其ノ長ヲ置キ各係ニ其ノ長ヲ置クコトヲ得。  
製薬部ニアリテハ部長副部長及技師長ヲ置ク。
- (2)部長ハ其ノ所管事務ニ付部員ヲ指揮監督シ副部長ハ部長ヲ補佐シ部長不在ノトキハ代理事務ヲ掌ルモノトス。
- (3)課長、技師長、工場長、試験所長ハ各所管事務ニ付社長又ハ所属部長ノ指揮ヲ受ケ其ノ所属員ヲ指揮監督ス。

(以下略)

#### 製 薬 部

- (1)当会社経営ノ基本業務タル営業品ノ製造及其ノ学理技術ノ研究ヲ掌ル。
- (2)部ニ関スル会計事務ヲ掌ル。
- (3)能率増進ニ関スル研究並ニ其ノ事務、部員ノ風紀衛生福利増進等ニ関スル事務ヲ掌ル。  
前各項ノ為次ノ課、工場及研究所ヲ置キ製薬部長ハ技術ニ関スル事務ヲ掌リ製造及研究ノ成績等ニ就キ其ノ指揮監督ノ任ニ当ルモノトス。  
製薬部副部長ハ作業ニ関スル一般ノ事務並ニ技術ニ関セサル外部トノ一般の折衝事務ヲ掌ルモノトス。

#### 研 究 所

製薬部長ノ直属トシ学理技術ノ研究ニ従事ス。

研究所ノ下ニ薬剤課及薬理課ヲ置ク

薬剤課 薬品ノ一般の研究並ニ原料材料ノ研究ヲ為シ併セテ其ノ試験及調査ヲ為ス。

前項ニ関スル総テノ書籍器具等ノ保管事務ヲ掌ル。

薬理課 薬理生理的試験並ニ研究ニ関スル事務ヲ掌ル。

事務課 製薬部長ニ属シ契約文書ノ取扱及保管、社員及傭員ノ人事、金銭物品ノ出納管理、部印ノ保管事務並ニ他ノ各課各工場ニ属セサル一切ノ事務ヲ掌ル。  
事務課ノ下ニ庶務係、会計係、人事係ヲ置ク。

作業課 製薬副部長ノ直属トシ作業ニ関スル一般の事務ヲ掌ル。

作業課ノ下ニ作業係、工務係ヲ置ク。

杭瀬工場 主トシテ薬品ノ製造及其ノ研究事務ヲ掌リ左ノ係ヲ置ク。

製造係、研究係、庶務係。

淀川工場 主トシテ薬品ノ製造及其ノ研究事務ヲ掌リ左ノ係ヲ置ク。

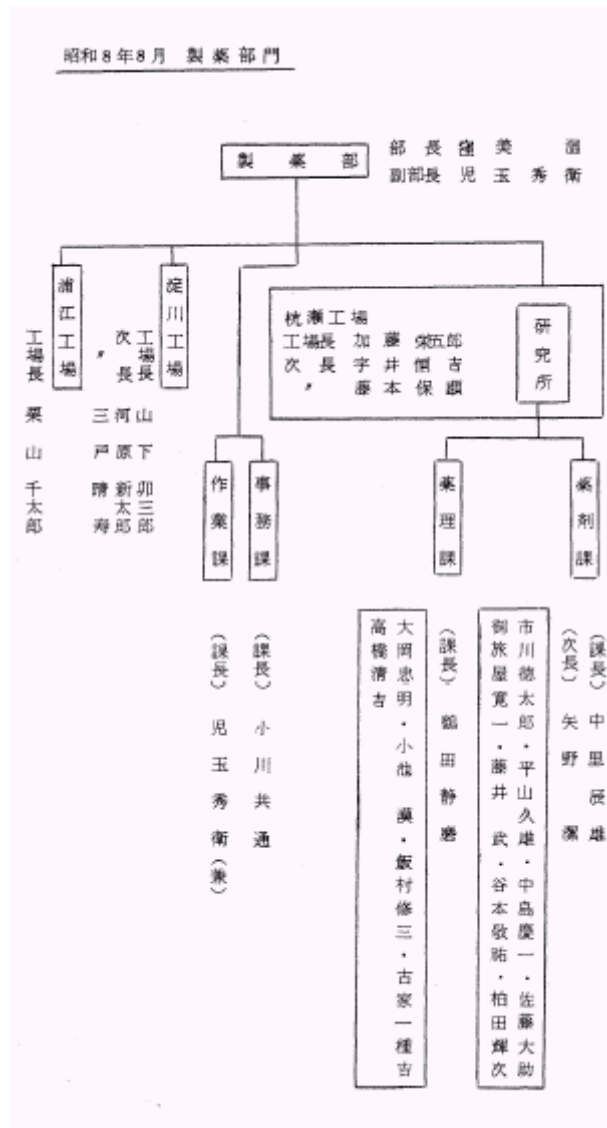
製造係、研究係、庶務係。

浦江工場 薬品ノ試験、加工、小分包装等ニ関スル事務ヲ掌リ左ノ係ヲ置ク。

試験係、加工係、小分係、庶務係。

尚、浦江工場内ニ薬品試験所ヲ設クルコトヲ得。

さらに同じ年八月一日付で製薬部門の人事異動を行なった。



## 不燃性乙卯研究所（渋谷区金王町）

昭和七年、大学教授の停年を五年後にひかえた博士は義三郎に自分の将来を相談した。

……貴君が漏らしたる胸中の秘は、之も私個人に対するためかと実は驚歎、事柄は私の理想に全然一致するとは云え、一面塩野義会社を離れたる社長個人が、何故に欺くまでの犠牲を決意せんとするに至りしか？一応の弁明は十分諒解を得たりとするも、尚且根本的の疑問なき能はず候。

理想を実現せしむる意図よりしての犠牲ならば、私は寧ろ会社の堪えうる程度に、研究所を縮小しても社長に累を及ぼさざるを喜ぶものに候。

五年の後大学を退きたる私は、如何に余生を送るべきや、何一つ遺産を有せざる私は、読書と研究により悠悠自適し度き事、私の死までの欲望に候。

読書は随所に行わるべく、研究は乙卯研究所を手寄るの外途なく候。

会社に悪しき変化なき以上現在の物質的条件にて、研究所は永続し得るものと思ひ込み居り、私としては全力を研究所につくし得る以上、少なくとも現在以上の成績を製薬部に与え得べく、また下阪して指導する機会も現在以上の便利を得べしと信じ候。また余力を割いて、学徒としての責任を果すべく、純学術的研究に精進する事もなし得るものと信じ候。唯一点私の立場が如何になるべきや？、理論を延長すれば、当然製薬部を引受けて入社する事最も有利の策と相成る可く候。

こゝに矛盾は初めて生れる。月給の点は両者互譲の途あらんも、而かも六十才を越えたる私が、製薬部の全責任を双肩に負うて、余生幾ばくもなき残骸を酷使するに忍びず候。また、社則としても定年上の考慮よりして、特にこの老体を煩わすを要せざるべし。寧ろ一生を上げて、貴君の知己、親友となり、会社の一顧問として、変通自在に外部より、会社に貢献せん事会社に忠なる所以にして、同時に私の余生を生き甲斐あらしむるものたりと信じ候。研究所を取り上げられて、実験の機会を失はぬ事。一面に顧問としての実値の大半を失うべく、而もなお、到底杭瀬の研究部に入所する能わずとすれば、不経済乍ら、研究所を現在のまゝ、東京に置く事を熱望する事となり、私が往年より将来に関して、悩みつゝありし矛盾はこの事に候。

(昭和七年七月二十日書翰)

かくして義三郎も、亡き塩野長次郎の精神を永遠に生かすためにも乙卯研究所を拡充し、将来同研究所を財団法人として、社会福祉の向上に力を尽したいと願う義三郎と博士との、血の通いが新研究所設立の具現へと進んだ。

研究所候補地が見付かったのは一ヶ月後の八月であった。

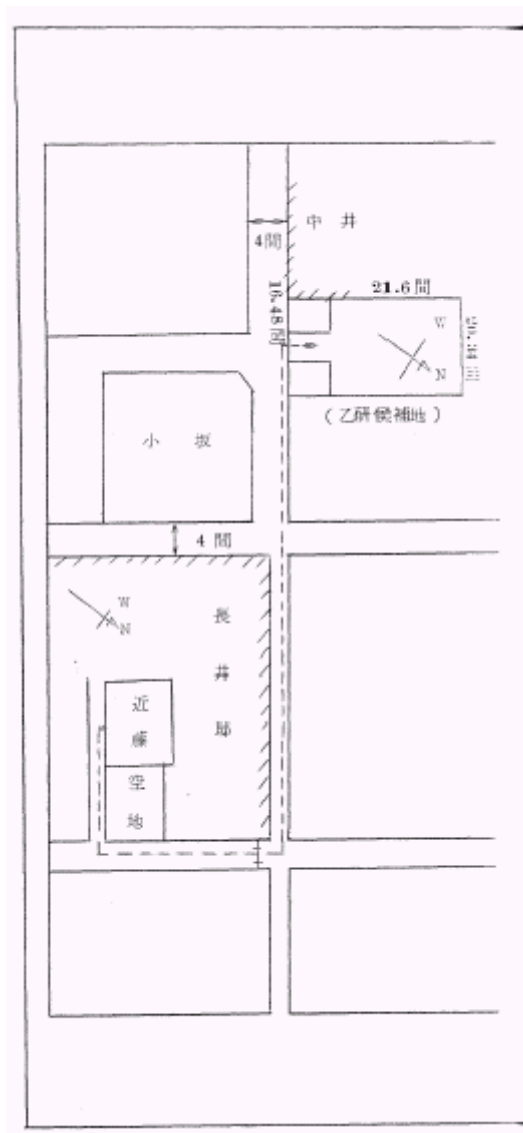
この候補地を発見したいきさつについて、“藤園回想”に詳しく記録されている。

義三郎への来翰によれば、

……御承知の候補地は、金王二十七番地笠原某の所有地にて、※四百五十坪、前は四間道路にて、民政の小坂順造氏と相對し、隣地は直接河西の親類中井四郎氏宅に接し居候。私宅より御申越により詳細なる地図上中心より方向を検するに真西に当り裏鬼門を脱れ居候。殊に私宅より直ぐ裏横町に当り長井邸内にあるも同様に候。……位置、坪数、交通の便、環境の民度、等其上に方位も申分なく、私としては満点理想の候補地に候。實際あまりに理想地が直ちに見付かったので夢の様に考えられ候。

※正しくは四百五拾六坪であり、その後買増し及び道路拡張に伴う売却などの変化によって、現在五百九拾六坪四合六勺と登記されている。





とあり、義三郎の私財を投じた事を証明する一文もある。

「西池氏より伺候に、社長のポケットより支出するお考えの由、兼ねての御苦情伺い居候故その一端かとも案じ上げ候も、何しろ大金につき、理想的の候補地とは云え一に熟考の程願上候」と。

十月いよいよ土地の登記もすみ、東大営繕課の土岐達人工学士を設計技師に依頼し、入念に設計の打合せをした後、工事は戸田組が引受けることになり、昭和八年六月三日午後三時地鎮祭を挙行了た。

昭和八年十二月博士は義三郎に門標「乙卯研究所」の揮毫を依頼した。

「新研の門標に包金製の「乙卯研究所」を記し度、技師側より実物大の紙片到着致し居り候に付、(私下阪の際携行候に付)強いて御揮毫煩はし度何卒御稽古なし置被下度候。私は始終出入する関係上是非永久の記念に貴君の直筆を鑄造し置き度、私の切望に候故、御辞退無用の事!!」

昭和九年五月、東京市渋谷区金王町二十七番地に近代的設備を整えた新しい乙卯研究所が誕生した。当時としては着工後一年で完成というスピードぶりであった。

塩野義三郎が達筆を揮った“乙卯研究所”のブロンズの文字は、白い門柱にふさわしく、明治四十四年以来の博士との交流を物語るかの様にも見えた。

新装成った昭和九年五月十五日、関係者を招いて研究所開きをおこない、当夜は東京会館で自祝の落成祝賀会を催した。

二階建研究所の延坪



乙卯研究所の門標  
(二代塩野義三郎筆)



乙卯研究所正門

は二百三十五坪で、内部構造は化学実験室七、図書室、還元室、暗室、電解室、光学機械室、薬理室、分析室、硫化水素室、所長室、事務室、応接室、その他地下薬品倉庫から成っている。

この建築のために要した費用は、当時の記録によれば建築費六八、七四七円、設備一四、三二六円計八三、〇七三円、その一切は義三郎個人が支出したものである。

博士が義三郎に送った乙卯研究所の建設経過並に支払一切を纏めた“新築移転記録”の扉には次の様に記録している。

「顧うに盟友塩野義三郎君、余の老年帝大の教職を退く亦近きにあるを察し、委するにこの輪奐の美と内容の充実せる乙卯研究所を以て、退職後余生の完結に資せらる。学徒の理想実に之に如くものなし、幸に内に全幅の信を措ける所員諸君あり、外に社長塩野氏の理解と製薬部諸君の支援を掌握す。

この環境に立ちて、孜々として倦まず、翼翼として勉むれば、必ずや一面に製薬工場の完璧に資することを得べきを信ず。

余の命数に限りあるも、研究所の生命は永遠にして、斯くしてこそ、始めて社長の厚意の一端に酬ゆるの途なるを信じ、こゝに記して以て後の盟となす。」

近藤平三郎

シオノギは明治末期から硫酸キニーネを輸入して、エチル炭酸キニーネや、塩酸キニーネの製造に着手していたが、昭和八年には年産六トンのキナ皮を原料とするキニーネ製造設備を完成、同時に社員をジャワに派遣して、キナ皮の入手調査にあたらせた。その結果、義三郎は当時、わが国土の最南端であった台湾に、キナ農場を建設すべく断を下した。

窪美温、平田保らがさっそく現場に派遣され、キナ栽培の研究と農場適地の調査を行なった結果、高雄州下の官有地八百ヘクタールを候補地と決めて、昭和九年九月台湾総督あて貸



台湾へ神戸出港前高千穂丸船上にて  
近藤博士(左)、塩野義三郎

下げを申請した。翌年十月、義三郎は台湾薬学会に出席する近藤博士と同道で台湾を訪れ、総督、台湾軍司令官、高雄州知事などにキナ栽培事業の必要を説明すると共に、京大演習林や農場予定地の蕃地ライ社、カピアン社などを視察した。

義三郎は博士とともに二つの海外旅行をしたのであるが、船中では企業運営の抱負を語り、博士の言に耳をかたむけていた。博士が大阪に見えると何時も研究所、工場の運営について博士の意見を質し、これを消化していった。

旅行中に義三郎が博士に、工場視察の結果まだ未完成であると思われる製品について意見を質したのに対し、東京に帰ってから義三郎へ次の様に報告した。昭和九年八月の書翰であるが、シオノギの当時の事情を知る参考迄に掲載する。

御約束の工場未完製と見做し得る製品左に申上げ置候。

没食子酸、アスピリン (尾高受持)

ドルミン、バルビタール	(岩城受持……目下市川により後者だけ未定)
硼酸	(脇屋受持)
アンチピリン	(田中受持)
アネステヂン	(三戸受持)
コラミン	(佐藤受持)

(以上は原文のまま)

昭和十二年十月十三日

「退職の期も刻々相迫り跡を濁さざる御奉公の結末のため唯心忙しく、十二月十一日後心易き隠居の身となりて下阪仕る事に致候間何卒御諒承被下度候」

博士から義三郎に送られた書翰である。

昭和十二年十二月十一日、博士にはちょうど還暦を迎えた日であった。規定の退官の日より三ヵ月早く、最終講義を行なった。本来なら来春三月の学年末に退任するのが不文律になっていたが、渋谷の乙卯研究所にたてこもって、研究をつづける決心をした博士にはその潔癖性がそうさせたことと、気鋭の落合英二教授に一日も早く後継の経倫をふるわせてやりたかったからだともいう。この時をもって、長い大学生活から去り以後は乙卯研究所長として引続き指導に当られた。

昭和十三年八月五日、帝国大学令第十三条により、勅旨をもって東京帝国大学名誉教授の称号を授けられた。

この事と相前後して乙卯研究所は文部省民間学術研究機関たる資格を得て財団法人組織の基礎固めが出来た。基本財産（土地・建物は昭和十三年八月二十三日付で名義変更）および運営費は塩野義三郎の友情からの潤沢な個人出資によるものであった。財団法人認可前後の博士からの来翰を掲げる。

昭和十三年六月八日

財団法人関係乙卯研究所の保存登記も私名義にて相済み所員の略歴、図書目録、価格、器具器械目録等本店岡田君の注文通り略相整い待ち居候次第に候。

昭和十三年七月三日

乙研財団に関する沿革抄録出来申候他の書類と一括研究所に取纏め有之岡田氏の上京待居候間全氏へ伝言被下度候。

昭和十三年八月十日

本朝支店より電話にて乙研財団、文部省より内報認可有之候申し参り候定めし御承知の事と存候得共為念申上候。

昭和十三年八月十三日

本日東京府庁より財団法人設立許可書類到着致候、何卒御安心被下度候。

昭和二十年五月の空襲では博士の自宅は、灰燼に帰し、乙卯研究所は八十七発の焼夷弾に見舞われた。その一発は理事長室の天井を突き抜けたが、奇蹟的に類焼を免がれた。それは助手岩崎と事務員近山父子を督励して乙研を守り抜いた成田象一の功績であった。博士は成田に感謝状を贈り表彰した。

昭和二十年五月二十五日夜半ノ米機大空襲ニ際シ財団法人乙卯研究所ハ渋谷駅ニ近接セル環境ニ禍セラレ特ニ敵機ノ集中攻撃ニ直面セルニ拘ラズ強烈ナル「テルミット」ノ直撃

ト四面ヨリ肉薄セル猛炎熱風中ニ挺身シテ断然徹宵抗火消防ニ従事シ一身ノ危殆ヲ犠牲ニシテ遂ニ研究所ノ戦災ヲシテ克クソノ三〇%以下ニ抑圧シソノ七〇%以上ヲ保全セシメ得タル功績ハ誠ニ国策敢闘ノ精華ニシテ亦乙卯研究所悠久ナル歴史ノ燦然タル一頁ヲ占ムルモノト確信ス

戦災ノ翌日曙光ヲ俟チテ親シク研究所ニ到リ一望戦火ノ余燼尚熄マザル焼土ノ真只中ニ独リ我研究所ノミ毅然トシテ其聖容ヲ朝暾ニ輝カスノ奇蹟ヲ発見シ無量ノ感激極ッテ言語ヲ成サズ茲ニ意中ヲ尽シテ無限ノ感謝ヲ表彰スルモノナリ

昭和二十年六月二十六日

財団法人 乙卯研究所  
理事長 近藤平三郎 ㊞

乙卯研究所々員  
成田象一博士

### 近藤博士のおしえを受けた人々

〔ゴジツク及び( )は在籍者現職名、他は退職者退社時職名とす〕

近藤平三郎博士の門下からは東大を大正十一年に卒業した福田鉄雄はじめ多数の俊秀がシオノギに送られた。

即ち、市川徳太郎(旧姓真田一杭瀬工場次長)は大正十三年の入社であるが長年乙卯研究所で研鑽を積んだ後杭瀬工場において勤務をされた。

次いで十四年に卒業した矢野潔(常務取締役製薬部長)は翌年の十五年に卒業した富田真雄(後年京都大学薬学部教授に転出)と共に乙卯研究所で防已科植物アルカロイド類の研究を遂行された重要なスタッフであったが、矢野潔は近藤博士の推薦により昭和八年シオノギに入社した。富田真雄はその後も乙卯研究所において防已科植物アルカロイドの研究を続行したが、昭和十三年には京大薬学科教授となり昭和三十五年にその仕事で学士院賞を授与されている。大正十五年には宇井恒吉(取締役神崎川工場長)、中里辰雄(取締役浦江工場長)の二人が同時に入社した。

また、昭和二年には岩本薫(特許部副長)が卒業と同時に入社、その後約一年間乙卯研究所に留学し近藤博士の直接の指導を受けた。

その頃大正十四年金沢薬専を卒業した**島田群吉**(取締役サンスター部長)は乙卯研究所で「アセト酢エスの合成」「ビスマス剤」等の研究などに余念がなかったが、三年の修業を経て近藤博士に願い出て昭和三年シオノギに入社、六ヶ月後「金液の研究」で再び一年乙卯研究所へ留学している。

箱崎幸太(研究所員)もまた昭和三年卒業と同時に入社した近藤博士の門下である。一年後には昭和三年卒の高松敦(資材部副長)が入社直ちに乙卯研究所へ一年の留学をした後東京支店新薬課長として新薬開発業務に従事した。その後企画部、資材部などの副長を経て二十四年退社している。昭和四年卒には遠藤勝(日室塩野を経て神崎川工場第一、第二課長)が居った。その頃杭瀬工場に在籍した須藤明之助は昭和五年の卒業である。

昭和五年東大薬学科には機構の改革があり、臓器薬品化学講座が新設された。新講座には薬化学第二講座(近藤博士主宰) 助教授であった緒方章博士が外遊から帰って主任教授となり薬化学の助教授に落合英二博士が就任したが間もなく外遊の旅に出た。

昭和六年には**岩城徹**(専務取締役第一営業部長)が卒業と同時に入社、同年卒業の**坂五十雄**(研究所員)もホシ製薬を経て昭和十三年に入社した。又同期の**武田健一**(専務取締役研究所長)は卒業後母校医学部副手となり、近藤博士の指導を受けていたが翌年には幹部候補生として十ヶ月間歩兵第三連隊に入隊、その後も引続き近藤博士指導のもとに天台烏薬中のセスキテルペン類の研究に没頭した。その後支那事変の為出征し、帰国後は乙卯研究所で戦時研究に従事し昭和二十年四月杭瀬工場に移ったのであるが、昭和十年前後の近藤教室には昭和四年卒業の津田恭介(応用微生物研究所教授)、昭和七年卒の上尾庄次郎(京都大学薬学部)等の逸材が数多く集り津田恭介は長井先生時代よりの難問題であったマトリンの研究を、又上尾庄次郎は近藤博士の重要なテーマの一つである彼岸花アルカロイドの研究を中心にそれぞれ大いに業績が競われた非常に華々しい時代であった。津田恭介はその後昭和四十一年その当時からの仕事である苦参塩基を中心とする荳科アルカロイドの化学的研究に関し学士院賞が授与されている。その頃は乙卯研究所においてシオノギ関係の研究問題が遂行されるかたわら防已科植物アルカロイドの研究が行われ一方では近藤博士のその他の重要課題は大学で実施されていたがお互に緊密な連絡をとりながら美事な成果をあげていた。これら富田、津田、上尾等はその後も落合博士を先頭に後出の宮木高明と共に近藤博士の主宰する乙卯研究所の蔭の盛立て役として大いに預って力があつた。岩城、坂、武田と共に机を並べた渡辺敏雄は卒業と同時に大学にとどまり博士の指導を受けたがシオノギ社員のまま乙卯研究所勤務になったのは昭和十年十月であった。

昭和七年卒業には**有留輝次**(取締役)池田鉄太郎(企画部長、現武庫川大学薬学部長)中島慶一がいる。池田鉄太郎は乙卯研究所にあってオウロパンの合成、ハスノハカヅラのアルカロイド等の研究を行ない、その後戦時研究として紫光、虹波の研究に従事したのちシオノギ研究所(杭瀬)に移りその後企画部長としての職責を尽くした。**有留輝次**(取締役)は卒業後三田薬品製棟所に入社(昭和十九年合併によりシオノギ和歌山工場となる)、昭和九年にクエン酸醗酵法で乙卯研究所へ二ヶ月の留学をしている。その後シオノギ和歌山工場長、神崎川工場長、杭瀬工場長などの要職もつとめた。中島慶一は卒業と同時にシオノギ研究所に入社したが間もなく事情により退社した。

さかのぼって近藤博士は昭和三年頃から門下の井上秀季(当時大連で製薬会社経営)からセンソの薬用成分の研究を依頼されたのがきっかけで昭和五年卒業の井川俊一等と研究に着手しシオノギは昭和十二年「ブホタリス」昭和十六年「ネオブホタリス」として発売した。井川俊一のもとで助手をした**永井通景**もこれが縁で昭和十年入社した。昭和九年には大野節郎が卒業し入社したが乙卯研究所においてセンソ成分の研究を続行し昭和十六年の秋にシオノギに戻った。

昭和十一年五月シオノギは業務規程を改正。乙研勤務者の退職慰労金を清算し、そして改めて乙卯研究所との間に覚書を交わした。退職慰労金の対象者氏名は、成田象一、中島知一、

富田真雄、池田鉄太郎、大野節郎、渡辺敏雄の六名で、給与支給もこの六名が、昭和十一年五月三十一日現在シオノギの社員待遇を受けていたものと解すべきであろう。なお、このきの覚書全文を後述する。※

また、昭和十一年に卒業した人達のうち小沢俊三郎（杭瀬工場）は杏林薬品を経て昭和十八年に、雨宮賢三（東京支店次長）は全国購買連合会を経て昭和十五年に、**石川正雄**（特許部長）は参天堂、東大薬学助手日室塩野を経て我社にそれぞれ入社した。又同期の**浜元要**（動物薬品部長）は海軍薬剤官を経て昭和二十一年に入社している。昭和十二年卒業の石川茂樹、参木義雄は卒業と共に直ちに入社したが石川茂樹はその後病魔に倒れ、参木義雄は事情により間もなく退社した。昭和十九年には**岩谷潔**（動物薬品部）が東大専科生を経て入社した。

昭和十二年十二月十一日は近藤博士の六十回目の誕生日であり、その還歴を記念した最終講義を行い同日をもって東京大学教授をやめられたわけであるが、その時の最後の門下生に**宮崎誠一**（企画部長）や専科生の**市川善太郎**（製造部第一試製課）が居る。

乙卯研究所へ留学した第一号は、大正六年の口羽与三郎、三戸晴寿の二人であるが、昭和十年には、平山久雄（赤穂工場長）が「有機微量元素分析の研究」のため一ヶ月、十三年頃「ハセスロールの製造方法」で**田中穂積**（専務取締役製造部長）が約一ヶ月半、さらに昭和十七年から十八年にかけて**坂五十雄**、八束精一、玉村幸治郎、**大坂弘**（製造部第一試製課）、**沢田義人**（製造部技術課）ら五人も交互に「セファランチンの研究」で約半年間留学し、近藤博士の指導を仰いだ。

乙卯研究所を語るとき、近藤博士のほか創設時代から博士と行を共にした成田象一を忘れることは出来ない。

明治二十七年四月、愛知県知多郡大府町大府に生まれ、明治四十五年三月、愛知県立第二中学校を卒業、大正元年から金沢医学専門学校薬学科に学び、大正四年九月全校を卒業するや乙卯研究所設立とともに十月一日付を以って同所に入った。

当時は、衛生材料廠助手の岡田十一郎と二人で近藤博士の指示により研究に入ったことは前述のとおりであるが、大正時代から昭和初期にかけて近藤博士の打ち込んだ水金に研究の大部分を捧げた。彼は温厚誠実型の余り目立たない存在であったが、関東大震災では青山南町の乙研を守り、太平洋戦争に於ても敢闘して渋谷の研究所を守り抜き、博士より感謝状をいただいたことは余りにも有名である。

また、シオノギより留学する人々に対し何くれとなく研究に関する世話をし、昔の留学時のかたりぐさに必ず成田象一の名がのぼる。

博士は防己科アルカロイド序論の中に「富田真雄と同じ頃、コウモリカヅラを分担した乙研の成田象一は、ダウリチンを単離して、構造研究を進めて行くうちに、はからずも同じような物質をもった酸を見出した。しかもその中の酸素原子の性質を証明出来ない幾種かのアルカロイドを発見したのであった。」という。

アルカロイド関係では「**Dauricin** の構造」ほか数編の論文を発表。昭和十三年からビタミンCの研究を続けた成田は昭和十八年「新醋酸菌による糖類の醗酵研究」も発表している

が、昭和十七年四月二日付で、近藤平三郎、成田象一、宮木高明（現在千葉大学薬学部教授）の連名によって発明特許を得ている。

本発明の主体である新菌は、“グルコノアセトバクター・2ケトグルコニクス・ナリタ”と命名されたが、この研究で博士の学位を得た。

アスコイル（VC注）其他ビタミンC製剤は、このときの副産物である前記新醋酸菌によるソルボースの製造特許（昭一七・二・一二）による所大である。

昭和三十九年四月、乙卯研究所を円満に退所し、世田谷区松原町で好きな学究に余念がない。

次に、青山南町乙研に入った中島知一は、陸軍衛生材料廠を退職して、大正六年九月シオノギに入社し、そのまま乙研所員として博士の指導を受け、初期に発売されたシオノギ製品についてはラキサトールをはじめ、塩酸シノメニンなど数々の製造指導を行なった。昭和十八年、乙研退所までのその間、博士の指導によって「4-ニトロサリチル酸の製造」「オホツヅラフジのアルカロイド」などを発表している。

以上近藤平三郎博士の門下生や乙卯研究所で教えを受けた人々を挙げ簡単にその横顔をのぞいてみた。

※業務規程ノ改正ヲ昭和十一年六月一日実施シタルニ付全年五月末日現在ノ乙卯研究所勤務ノ業務員ニ対シ一応退職慰勞金ノ計算ヲ為シ左記金額ノ覚書ヲ交附ス。

計算シタル金額

金參千九百六拾円也	成田象一	金參百四拾九円也	池田鉄太郎
金參千九百六拾円也	中島知一	金百九拾五円也	大野節郎
金參千五百五拾九円也	富田真雄	金百貳拾參円也	渡辺敏雄

追テ前記成田象一、中島知一ノ兩名ニ対スル退職慰勞金ハ大正十五年六月一日ヨリ乙卯研究所へ入所シタルモノトシテ計算シタ。将来兩名退職ノ場合ニハ實際ノ入所年月ヲ考慮シ交附金ヲ増額スル事。但、乙卯研究所長ト交渉ノ上決定ス。

尚、覚書交附ト同時ニ乙卯研究所員ニ対シ左ノ勤務要領ヲ通達ス。

交附覚書

昭和十一年五月末日業務規定ヲ改正セラレ全日ヲ以テ退職慰労金ノ計算ヲ為シ慰労金交附ニ関シテハ一応之ヲ以テ打ち切りタルニ付以下覚書ヲ交附仕候。

第一条、 左記退職慰労金ハ将来乙卯研究所ヲ円満退職セラルトキ無利息ニテ之ヲ支給スルモノトス。

退職慰労金額

第二条、 前条退職慰労金ハ記名人ニ限り支給スルモノニ付其ノ譲渡ヲ認メザルモノトス。

第三条、 退職慰労金ノ支給ヲ受クル場合ハ乙卯研究所ヲ経テ当社ニ請求セラルルモノトス。

右ノ通り約定申上候ニ付本書御交附致置候也。

昭和十一年六月一日

大阪市東区道修町参丁目十二番地

株式会社 塩野義商店



殿

乙卯研究所勤務要領

- 一、 大正十五年六月一日ヨリ塩野義株式会社社員名簿ニ登記シアリタル所員ハ昭和十一年六月一日全名簿ヨリ全ク脱離セリ。
- 二、 所員ハ一面ニ会社製薬部ニ関スル研究ニ従事シ他ノ一面ニ純学術的ノ探求ヲナスベキコト旧ノ如シ。
- 三、 所員ハ所長ノ諒解ノ下ニ転出、退職ヲナスコトヲ得。
- 四、 所員ノ転出ノ場合ニハ先ヅ会社製薬部ノ需要ヲ考慮スルヲ要ス。
- 五、 所員ハ転出、退職ニ際シ詳細ナル研究報告及標本ノ全部ヲ所長ニ提出スルヲ要ス。



## 永遠に生きるもの

製薬事業に技術と頭脳の必要を見抜いた義三郎の慧眼、私財をなげうってすぐそれを実行に移した勇気、さらに終生のブレントラストとして近藤博士を迎えた幸運の三者が、塩野義製薬の発展を大きく決定づけたとあってよいだろう。

昭和二十八年六月、義三郎は支店開設以来はじめて、鈴蘭花咲く北海道へ視察訪問の旅に出た。

古稀を過ぎた老人とはみえぬほどの元気さであったが、北海道の旅から帰阪して一週間目の七月三日、突然右足の痛みを訴え、その後九月に入って病勢は昂進し、十月三日午前四時三十分、池田市の自宅で七十一才の生涯を閉じたのである。

義三郎と博士はこの時まで、乙卯研究所を通じてしっかりと結ばれていた。

十月五日阿倍野斎場で、専務取締役塩野孝太郎が葬儀委員長となって、盛大な社葬が営まれ、霊前に、

「社長が示されたあの高い理想に向い、身命を賭して着実、周到な歩みを力強く進めます」と誓いの言葉を捧げた。

間もなく孝太郎は塩野義製薬株式会社社長に就任した。

義三郎の遺言状は死に先立つ四ヵ月余り前の二十八年五月二十七日、彼自身の手で書かれた。死後明らかにされた遺言状には次の一項が読まれた。

「薬学研究奨励のため左の公益法人を設立すること。

- ① 名称 財団法人 篷 庵 社
- ② 目的 薬学を研究する個人または法人に経済的援助をすること。
- ③ 事務所 塩野義製薬本社に置くこと。
- ④ 資産ならびに出資方法

大阪市東区道修町三丁目十二、十三、十四番地の宅地三百六十七坪十九勺（一、二一三・八五平方メートル）の現物出資二千百四十一万四千二百円。」

遺言の趣旨に沿って翌二十九年三月、近藤平三郎博士および塩野孝太郎、沢田修太郎の三人が発起人となって登記を終わり、篷庵社が発足した。

当初は近藤博士が理事長、塩野孝太郎と沢田修太郎が理事、武田健一が監事にそれぞれ就任、昭和三十二年五月から落合英二、富田真雄両氏が理事に加わり、社団法人日本薬学会発刊の欧文誌 **Chemical Pharmaceutical Bulletin** 発行補助費を援助するほか、国内優秀化学研究者、団体に、研究費、設備費の補助を続けているが、昭和三十八年十一月二十七日理事会ならびに評議員会を開き、理事長落合英二、理事富田真雄、小林芳人、津田恭介、上尾庄次郎、塩野孝太郎、沢田修太郎に決定、現在にいたっている。

## 一つのすぐれた頭脳



近藤平三郎博士  
「アルカロイド研究の回顧」  
昭和28年11月21日発行

近藤の藤に因み「薬化学の花を咲かせた園」という意味で近藤博士の東大教授退官を記念して、門下有志の発企で藤園会が生まれたという。

昭和二十八年早春のある日、藤園会を代表した、緒方章、落合英二両博士は近藤博士を訪問して、七十七才の喜寿を祝して報文集を発刊し、記念事業にしたい旨を告げた。

題名は“アルカロイド研究の回顧”で落合英二、津田恭介、富田真雄、上尾床次郎、野副利一、高橋酉蔵の各教授が執筆を担当し、編集には落合、富田、上尾の三教授のほかシオノギ研究所長武田健一が当たった。千二百六十余頁という尨大な書巻が完成したのは菊花香る十一月であった。

シオノギは、昭和三十三年三月十七日創業八十周年を迎えた。

塩野孝太郎社長は「シオノギが常に発展を続けて来たことは、それぞれの時代の経営者の進歩的な着眼施策の賜物であり、またそれぞれの時代にシオノギにあったすべての人々のすぐれた働きの成果である。」と先人の功績をたたえ、「昭和三十三年と一九五八年と、明治十一年と一八七八年とを較べて考えるとき果して八十年間に西欧との落差が埋めつくされたであろうか。」

「シオノギの目標達成に更に一步近づくために、シオノギ三、〇〇〇人の人々の一層の努力を要請する。」と結んだ。

八十才を迎えた近藤博士もまた、シオノギ創業八十周年を祝福して、一文を寄せている。それは、シオノギの基礎を作り上げた二代塩野義三郎、塩野長次郎との邂逅からシオノギ生成発展回顧の歴史、そして現社長の慧眼をたたえたものであった。

八十周年記念事業として社長が発表した抗生物質の工場は三十四年に、そして創造の殿堂新研究所は三十六年にそれぞれ建設されていった。シオノギを愛し、シオノギのために働き、そして今のこのシオノギの骨格をつくり上げてきた二代塩野義三郎社長の生涯を書いた「二代塩野義三郎伝」も三十六年には上梓された。

この伝記には明治四十四年から昭和二十八年までの博士と義三郎の関係をまとめて、「乙卯研究所」の一章をもうけている。

博士はこのとき「乙研の今日ある、一に同君生前の好意に拠るもの、今度の伝記の刊成に当り感謝の念を新らたにし、永久に同君の徳を仰ぎ度存じます。拝具」と簡潔にして真心のこもった一文を寄せた。

昭和十三年近藤平三郎博士の後継者として薬化学（薬学第二）講座を担当した落合英二教授は、昭和三十三年六月二十六日を以つて還暦を迎えた。

明けて三十四年三月十二日、三十五年間専念された東大薬学部の教壇を去る日、最終記念

講義が東大医学部三階大講堂で行なわれた。「キナ塩基誘導体の合成」と題して、医薬品発達の歴史と因縁の深いキナ塩基を選び、その誘導体の合成について昭和十七年以来薬化学教室で進めてきた研究過程を講義した。

五月に東大名誉教授の称号をうけた落合博士を待ちうけていたのは近藤博士であった。「私は待ち構えて落合東大名誉教授に乙卯研究所長の椅子を譲った。……」（三十四年九月）と、藤園回想に語っている。

シオノギ研究所では、夏のシンポジウムに三十三年頃から毎年落合博士を迎えて研究討論に指導をいただいていたが、三十四年「キナ塩基の変換」と題して特別講演会なども開いた。シオノギ研究所発展のため、特に毎月欠かさず研究討論会にはご出席をいただいている。

落合博士は、また、昭和三十八年一月八日宮中で行なわれる新年恒例の御講書始の儀に講師の一人に選ばれて、天皇、皇后両陛下に“アルカロイド”についての御進講を申し上げた。生物に御造詣ふかい天皇は御感興深げに拝されたという。

乙卯研究所の誕生から三十四年間見守ってきた近藤博士は、重荷を下ろした面持ちで、三十四年十月、シオノギ研究所を訪問、研究員と親しく第一会議室で会食を共にし、一同を激励して別れた。几帳面な博士の顔には、財団法人理事長の重責を全うする決意と乙研年報を続刊して、世界各国の研究に資したいという明るい希望に輝いていた。

昭和三十三年十月中旬、近藤博士は文部省から「文化勲章授与内定」、の通達を手にした。このとき、一瞬眼を疑ったほどだったという。喜びの様子がうかがわれる。



授与式後宮内庁玄関で岸首相・灘尾文相と語り合う  
文化勲章受賞者  
（左から）野副鉄夫氏・北村西望氏・岸首相・  
松林篤氏・近藤博士・灘尾文相  
（昭和33年11月3日）

その十一月三日、菊かおる文化の日、宮内庁に参候、玉座に着かれた天皇陛下から御言葉を賜った後、灘尾文部大臣から文化勲章および賞状を手渡され、宮内庁玄関前丸池のまわりで記念撮影が行なわれた。式のあと、表一ノ間で、陛下の御陪食にあづかった。

博士は、「この栄誉で努力の甲斐があり、薬学の分野が次第に認められてくることは喜ばしいことです。」と、記者団に語っている。

近藤平三郎博士は、昭和三十八年十一月十七日午後二時十分慈恵医大附属病院で、八十五才

の生涯を閉じた。病名は前立腺腫瘍である

昭和三十八年十月血尿が現われ、治療数日で血尿は消失したが十月三十日排尿困難、浮腫を生じ十一月一日慈恵医大へ入院した。二週間余の手当の効なく事切れたのである。

落合英二博士が葬儀委員長となり、東京青山斎場に於て盛大な、乙卯研究所と日本薬学会の合同葬が営まれたのは十一月二十七日であった。

この日塩野孝太郎社長の「一つのすぐれた頭脳」を、日本経済新聞の「あすへの話題」欄にのせた。

『日本学士院会員近藤平三郎博士が八十五才の天寿をまっとうして逝（せい）去せられた。きょうは、その葬儀が東京・青山でとり行なわれた。

博士はその生涯の大部分を有機化学、特にアルカロイドの研究にささげられたが、博士の残された多くのすぐれた業績は、内外の学界において高く評価せられるとともに、文化勲章その他数々の榮譽に輝いておられる。それと同時に、博士がその長い研究過程において多くのすぐれた学者を育て上げられたことと、日本製薬工業の確立・発展に大きい寄与をせられたことは、また博士の不滅の偉業であると私は信じるのである。

「元来われわれの研究は、万事が実験の基礎の上で組み立てられて、その結果を全体に及ぼし、もって理論に矛盾をきたさしめないことが大切なる主眼であるから、いちおうの実験にして所期に反する結果の場合はもちろんのこと、しからざる場合でも縦横に反復吟味して、これを確立したうえでなければ、理論をうんぬんする資格はない」と後年自ら書いておられる。

内外の文献から得られる該博な知識、正確な実験、そしてその結果としての明快な理論設定 — このように卓抜な科学者であった博士の協力者として、前人未踏の仕事の解決に取り組んでいくその過程において、多くのすぐれた化学者が生まれ育ってきたのは、あるいは当然というべきかもしれない。

製薬工業の指導については、こんな思い出の記が残されている。「仕事の故障の解決や仕事の改善のために、細部に立ち入って現場の人とともに勉強して、生産に寄与するとともに、自分の開発に努力した。」このような努力の成果として、製造過程が改善せられたり、りっぱな化学者が養成せられたりするだけではなく、経営方策をも含めて企業の中のあらゆる技術に、博士の実証的方法が強く深くしみこんでいくのであった。

真にすぐれた学者であってこそ、すぐれた教育者であり、すぐれた産業指導者でありうるという典型を、博士の長いきびしい研究生活に私は見るのである。

博士の喜寿のお祝いに、門下たちが博士の主要な業績をとりまとめて広く後進に資せんとせられた。その編集方針の中に「必要があれば忌憚（きたん）のない批判を加えることにした。これこそ先生の学風に添うゆえんであり、また往年の研究に対する門下生の的確な批判を、教育者として先生は本懐に存じられると拝察したからである」との一項がみられる。この師にしてこの弟子（でし）ありの感を深くするのは、私だけではあるまい。

博士は七十五歳の高齢になって、なおひとつのアルカロイドの構造決定をなしとげておられる。その博士が、まだまだ多くのなされるべきことを残して、忽然（こつぜん）と逝（ゆ）かれたのである。しかし、そのすぐれた門下の人々が博士の学統を守りこれを発展せしめつつ、ますますすぐれた仕事をつくり上げていかれることは必至だと私は信じる。

ひとつのすぐれた頭脳が、時間と空間をこえてその大きい影響をいよいよ拡大しつづけていく偉観に、私は深い感銘と尊敬を覚えずにはいられない。』

### 新 乙 卯 研 究 所 （ 世 田 谷 区 玉 川 町 ）

昭和九年五月渋谷区金王町に完成したその当時、最も近代的な設備を誇る乙卯研究所も、太平洋戦争による焼夷弾の雨をくぐり抜けて来て、建物の老朽化が目立ち、殊にインフレの急速な進行と共に、基本財産からの収入の価値が激減し、運営資金の逼迫さえ来たすにいた

った。

その結果として、近藤所長以下所員一同の絶大な努力にもかかわらず、戦後めざましく発達して来た新鋭設備の導入も見送らざるを得なかった。あわせて、物的人的両面にも次第に行詰りを来たし、経費の主要部分を、戦後の臨時対策として制定された文部省の民間研究機関補助金や同省の科学研究補助金などに頼りつつ、余喘を保つ状態に陥り、何等かの対策を講ずる必要に迫られてきた。

昭和三十八年十一月十七日近藤理事長の逝去により、研究所は一つの転機にさしかかったが、同月二十七日開かれた財団理事会は、落合英二研究所長を後任理事長に選定すると共に、故近藤博士および故塩野義三郎翁の遺志を継承して、特徴ある薬学の研究所として、運営発展させる根本方針を決定した。

そのための先決問題としては、経済的自立の方策を樹立し、同時に新風を導入する必要がある。幸いなことに、同研究所は国道二四六号に直面しており、しかも、渋谷駅からの至近距離にあって近代建築が次々と建ちならび地価は著しく高価となった。この土地の売却によって生ずる資金を以て地価の遙かに安い郊外の地を選んで、新しく研究所を建設し残余金を適正に運用することによって財団の財政を正常化する具体案を立てて主務官庁（文部省）の了解を求め、昭和三十九年十一月十七日の理事会

でこれを議決した。一方、新風を導入するための人事の交流刷新に努め、昭和四十年七月から、東大薬学部から新鋭助教授の夏目充隆博士を副所長として招聘した。

この基本財産の一部処分案は直ちに文部省に申請、昭和四十年七月二十日付で正式の承認を受けるにいたった。その具体化の結果として都内世田谷区玉川町に二、六四四・七平方メートル（八〇〇坪）の敷地を買い求め、そこに新乙研の工事を開始した。設計は坂倉準三建築研究所、施工は清水建設である。

研究所本館は九三八・九二平方メートル（約二八四坪）の鉄筋コンクリート造り二棟を階段で結ぶ機能的な設計である。

いよいよ九月七日落成して午前十時半から開所式に続き午後一時から開所披露を行なう運びとなった。

当日は朝比奈泰彦、緒方章、菅沢重彦、小林芳人、秋谷七郎、後藤格次、坂口謹一郎、石館守三ら東大名誉教授をはじめ、学界や業界の研究陣から関係者を招いた。



新乙研研究所正門から正面を望む



近藤記念応接室（入口から右）



近藤記念応接室（入口から左）  
近藤博士遺品陳列

落合乙研所長は、本館内の玄関の左側に大きな記念応接室を設けた。永遠に博士の遺徳をしのぶ記念の応接室として、創立者近藤平三郎博士および創立後援者塩野義三郎翁の遺影を掲げ、また近藤博士愛用の研究用諸器具、手記、文献、標本、机、書架などの遺品が収められている。

玄関の右側には、理事長室に並んで副所長室を設け、玄関正面の小階段によって研究用棟一階に通ずる。

一階研究用棟には、左に第一大実験室(同様の第二大実験室が二階にある)右に測定器室、元素分析室が並び、この測定器室には高感度ガスクロマトグラフィーを備え付けている。

二階には、大実験室、中央実験室、接触還元室、オートクレーブ室を設け、さらに、小階段によって一段高く書庫、閲覧室に通じ、閲覧室はコロキウム用講堂と所員の休養室を兼ねている。

大実験室は一、二階共に実験台のほかスペースを充分とり、さらに、戸棚の扉は感磁性黒板を兼ねて研究上のディスカッションもできるようになっている。空気調節は水冷式で能率もよく、また、実験中万一火傷が発生しそうな場合には入口のシャワーで直ちに対処できるよう危険防止の配慮もなされている。排気ガスなどの公害予防については発生ガスの性質によって洗浄液の種類を選び、シャワーで中和除害して大気中に放出するよう屋上ドラフト装置に新工夫が施された。

地階は配電室、溶媒蒸溜室、低温実験室、終夜実験室のほかNMR測定器室を設け、米国Varian製のA-60A型核磁気共鳴装置の他、赤外線および紫外線吸収スペクトル測定器が同居している。

このほか、倉庫が二つ、一つは事務用棟の地階に試薬保管庫と本館横に危険物倉庫を設けている。

乙卯研究所所長落合英二博士は、この新研究所落成に当って次のようにその感想を語った。

「近代的設備を持った待望の新研究所屋が落成したことは、乙卯研究所再建の一つの大きな峠を越したものとして慶びに堪えないが、同時に新たに加わった責任の重さを痛感する。この間に与えられた財団幹部各位、就中、塩野義製薬の塩野社長および武田専務の絶大な御支援と、土地の購入から建築の諸事にわたる一切の交渉を引受けて、文字通り献身的に腕をふるわれた藤本学博士の御活躍とに対しては、感謝の言葉を知らない。また、今日の披露には、学界各方面の名士、諸先輩を始めとして多数な来賓の御来臨を忝うし、如何に多数の方々が乙卯研究所の去就に関心を持たれ、且つ応援されつつあったかを、身に泌みて感じた。これら各方面の御支援に応え、新鋭な研究所にふさわしい、特徴のある新研究成果を続々産み出しつつ、優れた研究者を養成する責任、これが現在の私の頭を占めている最大の関心事である。」

義三郎翁の筆になるブロンズの門標は落合所長によってそのまま新しい研究所玄関入口に、又新たに塩野孝太郎社長寄贈になるブロンズの欧文入り門標が国道に面した外塀の入口に掲げられた。それらはシオノギの歴史と共に、これからの長い、果てしない未来とを物語

っているようであった。

その門標の一文字、一文字が折りからの夕日を浴びて一きわ鮮かに浮び上がっている。

### 参 考 資 料

「二代塩野義三郎伝」	塩野義製薬株式会社刊
「藤園回想」	藤園会
塩野長次郎追懐録「四十九年」	塩野孝太郎刊
近藤平三郎博士来翰集（塩野義三郎翁宛）	
「日新治療」（創刊号一五〇号）	
薬業時論（大正元年—大正一〇年）	
「工場の発展と製品の製造発売について」	三戸晴寿記
「調査会議事録」	株式会社塩野義商店
「研究所活動概要」	シオノギ研究所
「アルカロイド研究の回顧」	近藤先生喜寿記念委員会刊
「落合英二教授報文目録」	落合英二教授退職記念会刊
「一本の葦」	塩野孝太郎著
月刊シオノギ（九巻四号）	
“近藤平三郎先生とシオノギ”	武田健一記
「朝日経済年史」（昭和三年）	
社内報	シオノギ刊
篷庵社事業報告書	
Oil, Paint and Drug Reporter（1964）	Buyers Directory

## 乙卯研究所・シオノギ年表

乙卯研究所欄中[ ]又は( )は近藤博士関係事項  
ゴシック体活字は乙卯研究所事項とす。

西暦	和暦	乙卯研究所(近藤博士、落合博士)	シオノギ
1877 ～ 1909	明治 10(年) ～ 42(年)	<p>(静岡県加茂郡松崎町に生まれる) (明治 10・12・11)</p> <p>[東京帝大医科大学薬学科卒業 (33・7) 陸軍薬剤官として衛生材料廠勤務] (東京帝大医科大学副手嘱託) (35・1)</p> <p>[日露戦争に従軍、マトリンの研究中止、渡満 (37・6) 帰還 (37・9) ]</p> <p>[陸軍医学校教官となる。(39・8～40・8) 10月、独乙へ留学、有機化学専攻。 渡独中、薬学博士となる。]</p>	<p>初代塩野義三郎、薬種卸仲買商として創業(明治 11・3・17)</p> <p>二代塩野義三郎(幼名正太郎)生まれる。(14・11・15)</p> <p>塩野長次郎生まれる。(16・4・8)</p> <p>洋薬の取扱い開始。(19・ )</p> <p>大阪市北区相生町四十番地で製薬事業を開始。(カフェイン、塩化錫製造) (25・11)</p> <p>洋薬の直輸入開始。(30・ )</p> <p>相生町研究所の活動開始。(シエラック、アスピリン、白檀油、アンタチゼンの研究。) (41・6)</p> <p><b>アンタチゼン</b></p>
1910	43		塩野製薬所開設。(大阪市西淀川区海老江)(2月1日)
1911	44	<p>(独乙から帰朝)(3月28日)</p> <p>[陸軍省の命令で、傷病兵の転地療養所建設のため東北地方から温泉地の視察に向う。]</p> <p>[塩野義三郎・正太郎・長次郎三人の私宅訪問を受け正式にシオノギの顧問を承諾。]</p>	<p>五月、岐阜花屋旅館で塩野正太郎(二代義三郎)長次郎と共に近藤平三郎博士と初めて会う。</p> <p>この年から博士の技術指導を受ける。</p> <p><b>塩酸キニーネ、サリチル酸ソーダ</b></p>
1912	45	<p>(東京帝大医科大学講師嘱託) (3月23日)</p>	<p>(渡辺又治郎研究にかかるジギタリス製剤製品化につき近藤博士、シオノギに紹介。)</p> <p>塩野製薬所にてデギタミンを製造す。</p> <p>近藤博士にコカインの精製法とオイヒニンの製造を依頼す。</p> <p><b>デギタミン、次硝酸蒼鉛</b></p>
1913	大正 2		<b>ミオトニン、エチル炭酸キニーネ</b>
1914	3	[陸軍在籍のため工場技術指導に便なる東京に研究所設置を提案す。]	デギタミンへの注文増加。(第一次欧州大戦によりデガーレンの輸入杜絶)
1915	4	<b>「乙卯研究所」</b>	塩野製薬所プロテイン銀完成。



		<p>東京市芝区葦手町十六番地に、はじめて研究所をつくる。(10坪)(6月10日)</p> <p>(所員 成田象一・岡田十一郎 女子一名)</p> <p>乙研、プロタルゴール、水金の研究にかかると。</p> <p>(東京帝大医科大学教授兼任……11月)</p>	<p>塩酸エメチン</p>
1916	5	<p>乙研、ノボカイン、アペリトールの研究開始。</p>	<p>クロールカルシューム液</p>
1917	6	<p>乙卯研究所落成移転。</p> <p>(東京市赤坂区青山南町九十三番地に250坪を入手、44坪の木造家屋を建設)(6月10日)</p> <p>水金の研究完成す。</p>	<p>塩野製薬所から口羽与三郎(大5・3入社)、三戸春寿(大5・8入社)を乙研に派遣。(3月)(乙卯留学の最初)</p> <p>「日新治療」創刊。(5月)</p> <p>塩野重三郎、浦江上二丁目にて、ウルトラマリン、ゼラチンの製造に着手。</p> <p>ドルミン、ネオカイン</p>
1918	7	<p>第一次欧州大戦で欧米より水金の輸入杜絶のため、浦江群青向上で試製。(成田所員の指導を受く。)</p> <p>(14年ぶりに“マトリン研究”再開……2月)</p> <p>(北海道開道五十年記念道内薬業家大会で講演……8月)</p>	<p>塩野製薬所赤穂分工場にて炭酸マグネシアの製造開始。(1月)</p> <p>塩野製薬所(口羽担当)ラキサトール完成。</p> <p>炭酸マグネシア、ラキサトール、セカルチン</p>
1919	8		<p>株式会社塩野義商店設立。</p> <p>塩野義三郎商店と塩野製薬所合併、塩野製薬所は製薬部淀川工場となる。(6月5日)</p> <p>社長 初代塩野義三郎</p> <p>取締役 塩野正太郎・塩野長次郎 沢田久吉・津久井長甫</p> <p>監査役 堀内善五郎・塩野重三郎</p> <p>塩野製薬所赤穂分工場は千種製薬所として独立。(8月)</p> <p>ヒポホルム、安那加液、沃度蒼鉛エメチン</p>
1920	9		<p>初代塩野義三郎隠居(義一)、塩野正太郎、二代義三郎を襲名し、二代社長に就任。(2月2日)</p> <p>二代塩野義三郎、義一翁と共に乙卯研究所を訪問。</p> <p>塩酸シノメニン、ルテイノール</p>

1921	10	“おおつづらふじ”の主塩基シノメニン構造研究開始。……10月 (陸軍一等薬剤正となる。……11月)	浦江試験部の新設。(3月) 「塩野月報」創刊。(3月) パラヌトリン、ソムナール
1922	11		神戸醋酸工業の土地建物を買収、杭瀬工場とす。(5月) 塩野長次郎、薬理研究室創設のため人材を求む。 鶴田静麿(7月入社 薬理担当) 福田鉄雄(8月入社 化学担当)
1923	12	<b>防己科アルカロイド研究に着手し第一報を発表。</b> (東京帝大医学部付属病院薬局長代理)(1・11～3・7) <b>乙卯研究所(青山)、関東大震災に遭うも研究続行に大きな被害なし。……9月</b>	
1924	13	<b>乙卯研究所図書館を増築。</b> (45坪コンクリート建 地下1階、地上2階)	本社洋館落成。(12月25日) フアトシン、塩酸パラシノメニン
1925	14	<b>乙卯研究所は創立満十周年を迎える。(6月10日)</b> この頃の研究所員……成田象一、市川徳太郎、中島知一、富田真雄、矢野潔	調査会設置。(7月) <b>工用煨性マグネシア</b>
1926	15	(陸軍薬剤監(少将)に任ぜらる。)(3月2日) (長井会頭に随伴して大連日本薬学会に出席。……5月)	<b>シオノ葡萄糖注射液</b>
1927	昭和2		杭瀬工場内に研究所完成。(3月) <b>エキシカ、ガロステリン、ダゾール</b>
1928	3	落合英二、シノメニンの構造研究で学位を得る。 [「本邦産植物に含まれるアルカロイドの研究」により帝国学士院東宮御成婚記念賞を授与せらる。]……4月 [大礼記念賞を授けらる。……11月]	「調査会」は「営業品製造販売調査会」となる。(6月) エキシカ、ホスビン(武田)の販売競争道修町の耳目を集める。
1929	4	(塩野長次郎と共に欧米視察に出発……5月) [第五十二回の誕生日を迎える前夜ダムスタットで長井重雄から近藤博士父重熊の報を受く。……12月]	製薬部長塩野長次郎、近藤博士と共に欧米視察に出発。 <b>エキホス、ゲネゾール、ビオゼニン、パンセプチン、ボンホリン</b>
1930	5	[ドイツ化学会で「日本産防己科植物のアルカロイド」について記念講演	帰国(3月9日)

		を行なう。](帰国)(3月9日) 落合博士、東京帝大薬学科助教授となる。 [日本薬学会創立五十周年記念式典に際し名誉会員に推さる。……4月] 落合博士、欧米各国に外遊す。(7月)	シオノアスピリン、ゲルバミン
1931	6	(上海民国医薬学会にて講演(4月6日)のため上海へ向う。) (上海の旅を終えて帰国)(4月13日)	東京出張所、支店に昇格。(1月) 塩野義三郎、近藤博士と共に上海旅行に出発。(4月2日)乙研所員成田象一随行。帰国(4月13日) 塩野長次郎(5月10日)逝去。 窪美温(製薬部長)、山下卯三郎(淀川工場次長)乙研との連絡に当る。 営業品製造販売「調査会」新発足。(7月) 塩野義一(12月29日)逝去。 ヤトコニン、ナセドール、エチナール
1932	7	落合博士帰国す。(9月)	アンチピレチン
1933	8	不燃性の研究所をつくるため地鎮祭を行う。(6月)	製薬部、研究所職制確立。(業務規定の改正)(5月) 「塩野長次郎追懐録」発刊。(5月10日) 「塩野義一翁伝」発刊。(12月29日) キニーネ製造設備完成。 ハセスロール、パンセカール
1934	9	不燃性乙卯研究所完成。(5月13日) (東京市渋谷区金王町二七番地456坪鉄筋2階建)	ムルチン、コルニヂン
1935	10	乙卯研究所は創立満二十周年を迎える。(6月10日) (日本薬局方調査会委員)(9月21日) [台湾薬学会にて講演のため塩野義三郎社長と共に台湾に向う。(10月13日)] (帰国)(11月5日)	塩野義三郎、台湾クワルス規那園視察のため近藤博士と共に出発。(10月13日) 台湾薬学会総会に出席。(10月20日) 帰国(11月5日) プレホルモン、カフローゼ、ドルミン錠
1936	11	(日本薬学会副会頭となる。……4月) [エルンスト・スペート及びフリードリッヒ・クフナーとヒガンバナアルカロイドに関する論文を連名でベリヒテに寄稿。]	業務規定(退職金規程)改正により、更めて乙研所員との間に覚書交換、勤務要領制定。(6月) シオノギ研究所東館完成。(8月) ネオゲブルチン、ワゴスチグミン
1937	12	(日本薬学会会頭となる。……4月)(13年3月まで)	アスコイル、ネオパラヌトリン、アクチゾール、ナルカイン、

		(東京帝国大学教授退官、乙卯研究所 所長に専任)(12月11日) (還暦を迎える。)	<b>ブホタリス</b>
1938	13	落合博士東京帝国大学教授となる。 (3月) [東京帝国大学教授停年退官記念式 を全大学にて開催。(4月11日)] (東京帝国大学名誉教授の称号を授 けらる。)(8月5日) <b>乙卯研究所財団法人に改組。</b> (8月13 日) (財団法人乙卯研究所理事長兼所長 に就任)	<b>ゲドツクス、白色アクチゾール</b>
1939	14	(学術研究会議会員)(6月30日) 京大薬学科設立、乙卯研究所員富田 真雄赴任。	<b>セデス、アヂブロン</b>
1940	15		シオノギ研究所西館完成。(6月) シオノギ満州、中国への進出活発化。 <b>ホメチン</b>
1941	16	2 ケトグルコン酸特許出願公告手続 完了。(7月15日) —近藤・成田・宮木—	千種製薬所は塩野義化学工業株式会 社と名称変更。(2月) <b>ユバモン、ネオブホタリス</b>
1942	17	<b>落合英二、乙研理事、桂広太郎、監 事となる。</b> [満州薬学会大連支部総会に里見政 吉、井上秀季と共に出帆。遠藤勝、 富田真雄、矢野潔らと会う。](10月 20日)	ジャワ規那園経営受託。(9月) 塩野義三郎社長、日室塩野製薬株式会 社(興南)に赴く。 南方に出張所を設置。 <b>オウロパンカルシウム</b>
1943	18	<b>乙研暖房設備供出命令を受く。</b> (10 月) (旧組織を解散して公的な日本薬剤 師会が生まれ、小泉厚生大臣の推薦 で日本薬剤師会会長となる。…12 月)(21年10月まで)	社名を塩野義製薬株式会社とする。(7 月10日) 「日新治療」絶版。(11月) <b>ラザール</b>
1944	19	落合博士「芳香族複素環塩基に関す る研究」で帝国学士院賞を授賞。(5 月)	神崎川工場完成。(5月) 和歌山工場、泉尾工場設立。(6月) <b>スルフアゴン</b>
1945	20	<b>乙卯研究所戦災に遭うも類焼を免が る。</b> (5月) 成田象一、乙研防火につとめ近藤博 士より表彰を受く。 <b>乙研被災後、配電関係修理、図書、 機械の疎開を完了。</b> (6月)	杭瀬・浦江両工場被災。(6月) 和歌山工場被災。(7月) 塩野義化学工業株式会社を合併し、赤 穂工場とする。(8月)

		空襲により近藤博士宅焼失す。 [伊豆古奈ホテルへ疎開。……7月 一週に一度上京し乙研、日薬の所用 を果す。]	ラボラン
1946	21	(薬学教育審議会初代委員長となる …6月) (公職追放令の適用を受く。)	油日農場開園。(1月) 「月刊シオノ」発刊。(5月) 「最新医学」発刊。(6月) <b>ヘキシールレゾルシン、虹波、 紫光、アドルム錠</b>
1947	22		天皇陛下、杭瀬工場に行幸さる。(6月 12日) 福岡、札幌出張所支店に昇格。(6月) <b>オウロパンソーダ</b>
1948	23	(財団法人薬理研究会設立理事とな る。……5月) (古希を迎え、藤園会祝宴を薬業会館 で催す。……12月)	「月刊シオノ」を「月刊シオノギ」と 改題。(1月) 合理化運動開始。(5月) 「モダンセラピー」創刊。(8月) <b>サルファアダイアジン、 サルファチアゾール、 ネオカフローゼ、 イグノール、テンダール、 サンスター歯磨</b>
1949	24		和歌山、神崎川、淀川工場閉鎖。 <b>パラエス注</b>
1950	25	「乙卯年報」創刊。(9月) The Annual Report of ITSUU Laboratory	アンプル無菌小分室完成。(浦江工 場)(5月) 泉尾工場閉鎖。(9月) <b>サルミツクス顆粒、 ネオムルチン感冒錠、 強力パラエス錠</b>
1951	26		サルファアジン量産開始。(9月) 浦江第二工場稼動。(11月) <b>ハセルチン C、サルファアジン、 ブレパラ注</b>
1952	27		東京支店落成。(6月) デミング賞(実施賞)授賞。(11月22日) 塩野義研究所増築完成。(東館)(12月) <b>ツベロン、ポボン錠、ベンチル</b>
1953	28	<b>8年ぶりで乙研に電話開通。</b> (1月) <b>乙研所長室新装完了。</b> (5月) (日本学士院会員となる。……10月 23日)	ビタミン B <sub>1</sub> 量産開始。(8月) 塩野義三郎逝去。(10月3日) 専務塩野孝太郎社長に就任。

		「近藤平三郎、アルカロイド研究の回顧」を記念出版。(近藤先生喜寿記念委員会)(11月21日)	<b>アイロタシン、強力パラエス注、高単位ビタミンB<sub>1</sub>錠、ポボンS</b>
1954	29	落合博士日本学会議会員となる。	財団法人篷庵社設立。(3月13日) 理事長 近藤平三郎 理事 塩野幸太郎、 沢田修太郎 監事 武田健一 台湾出張所開設。(3月) (昭和41年10月11日台北出張所と呼称変更) <b>サイクロライド錠、ACTH</b>
1955	30	落合博士スイス及びドイツへ出張。(7月)続いて国際純粋応用化学連合(IUPAC)第十八回総会に於いて有機化学部会委員に選出さる。	ビタミン剤の輸出増加。 技術提携品の国内生産推進。 <b>ウインタミン、ピレチアジン、メチコルテン、シーパラ注、メジコン、パンテーン</b>
1956	31	落合博士日本薬学会会頭となる。(1月)	杭瀬工場に新製剤工場完成。(7月) <b>プレドニン、ムルチンS、ロイマゾン</b>
1957	32	落合博士通商産業技官。(審査第三部付)(4月)	基本方針の制定。 シオノギ研究所速効性強心利尿剤ジギコサイドの創製に成功。 <b>コランチル、小粒ポボンS、ノアルテン、ジギコサイド</b>
1958	33	落合博士東京大学院化学系研究科委員並に高分子学会理事。(4月) 落合博士還暦を迎える。(6月26日) (文化勲章を受賞)(11月3日)	シオノギ創立八十周年を迎える。(3月17日) シオノギ研究所 純国産新持続性サルファ剤「シノミン」の発見。 <b>ヤングミン</b>
1959	34	落合博士東大教授退職、報文目録・最終講義要旨発刊。(退職記念会委員)(3月12日) 落合博士乙卯研究所二代所長に就任。(9月)	抗生物質工場(アイロタイシン工場)完成。(3月) シオノギ研究所 高単位V・C製剤シナールの完成。 <b>シノミン、シナール、強力ムルチン</b>
1960	35		ホフマン・ラ・ロシュ社への「シノミン」の技術輸出契約成立。(7月) <b>アイロゾン、アナドロール、フルイトラン</b>
1961	36		「二代塩野義三郎伝」発刊。(5月) シオノギ新研究所落成。(地下1階、地

			上7階) ステロイド全合成に日本薬学会学術賞。(7月19日) <b>パイロン、 動物用シノミンソーダ散</b>		
1962	37		シノミンに科学技術庁長官賞。(4月16日) 杭瀬工場新製剤包装工場増築落成。(地上6階)(6月)  新倉庫・事務所(杭瀬)落成。(地上6階)(9月) <b>リンデロン、EA錠、 エンドキサン、 トライロン「トマト」</b>		
1963	38	落合博士宮中新年恒例の御講書始に天皇皇后両陛下に「アルカロイドについて」御進講。(1月) [午後二時十分逝去。(11月17日)勲一等瑞宝賞を授けられる。] (青山斎場で乙卯研究所・日本薬学会合同葬挙る) (法号「観艸院殿楽誉平堂広濟居士」(11月27日) 落合博士乙卯研究所二代目理事長に就任(11月27日)	杭瀬工場ユテイリティ・センター完成。(冷源および原動センター)(地下1階、地上4階)(9月) 財団法人篷庵社(11月27日) <table border="1" data-bbox="901 990 1345 1173"> <tr><td>理事長 落合英二</td></tr> <tr><td>理事 富田真雄、小林芳人、 津田恭介、上尾庄次郎、 塩野幸太郎、沢田修太郎</td></tr> </table> 醗酵工場(杭瀬)増築完成。(12月) 塩野孝太郎社長「一つのすぐれた頭脳」を日本経済新聞に寄せ、近藤博士の偉業をたたえる。 <b>幼児用ポボンS、キルパール、 動物用シノミン注</b>	理事長 落合英二	理事 富田真雄、小林芳人、 津田恭介、上尾庄次郎、 塩野幸太郎、沢田修太郎
理事長 落合英二					
理事 富田真雄、小林芳人、 津田恭介、上尾庄次郎、 塩野幸太郎、沢田修太郎					
1964	39	「藤園回想」を出版。(藤園会)(2月)	臨床検査室完成。(5月) 台湾シオノギ工場完成。(11月) <b>ビオミツクス、コルヒチン錠、 ニューレプチル</b>		
1965	40	落合博士日本学士院会員となる。(1月12日) 乙卯研究所は創立満五十周年を迎える。(6月10日)	研究所内に日本最初のX線解析装置完成。(3月) 植物薬品実験室完成。(油日農場)(7月) 催奇形性試験室およびユテイリティ・センター完成。(油日農場)(10月) <b>ルトラール、スルモンチール、 エルコクイン錠、ジセタミン錠25、 パイロンS、ダイミツド水和剤、 ルビトツクス乳剤</b>		
1966	41	乙卯研究所新築落成移転。 (東京都世田谷区玉川町一四九七)	赤穂植物薬工場完成。(5月)		

	<p>(敷地 二六四四・七平方米 本館 九三八・九二平方米) (9月7日)</p> <p>(所長) 落合英二 (副所長) 夏目充隆 (所員) 尾中忠正、多賀淳一、 百々俊之、高橋誠 (用務員) 大畑大三郎、橋本千鶴子 (囑託) 木村竹子 (研究員) 田辺了資、上野哲郎 (シオノギ派遣研究生) 藤本学、 徳竹伯夫、酒井満喜子、 松本敦子</p>	ケフリン、トレフアノサイド乳剤
--	--	-----------------

乙 研 小 史  
昭 和 四 二 年 一 月 三 十 日  
発 行 ・ 発 刊  
塩 野 義 製 薬 株 式 会 社 資 料 室

本「乙卯研究所小史」は塩野義製薬株式会社資料室発行、発刊の原文（B-5版、縦書、全70ページ）を(財)乙卯研究所においてA-4版横書きに再編集したものである。  
平成17年4月21日